

# ポール・ヴァレリー『註と余談』の生成研究

平成 15、16 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））による研究成果報告書  
（研究課題番号 15520143）

平成 17 年 3 月

研究代表者 今井 勉

東北大学大学院文学研究科助教授

## 序言

ヴァレリーの生前に公刊された言わば「表」の散文テキストの中で、『註と余談』（1919年10月刊行）は重要な位置を占めている。とりわけ「意識」をめぐるヴァレリーの思考が、あるときは筋金入りのロジックに鍛えられた言葉のかたちをとりつつ、またあるときは詩的な比喩のイメージ豊かな言葉のかたちをとりつつ繰り広げられているこの極めて（審美的な）テキストは、ヴァレリーを論じる場合、とりわけその思考の原理的な側面に言及する場合に不可欠な論拠として、必ずといってよいほど参照されるテキストである。ところが、そうした重要性にもかかわらず、整理された草稿の綿密な検討に基づく実証的な作品研究は存在しない。これと同じ現象は、1895年のデビュー論文『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』においても起きていた。たしかに、ジャンヌ・ジャラの国家博士論文（*Introduction aux figures valéryennes*, Pacini, 1982）は一定の成果を示したが、『序説』のテキスト生成の具体的検討に関しては、草稿整理が進んでいなかった時代的制約もあり、不十分であったのは否めない。筆者の課程博士論文（『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』論、1997年、東京大学）は、ジャラの成果の上に立ちつつ、そこで見落とされていた視点を基礎から洗い出し、特にintertextualité と génétique の観点から、『序説』のテキスト場の生成の道筋に新たな光を与えようとする試みであった。今回の科学研究費補助金による研究は、『序説』から25年後に書かれた『註と余談』を対象に、同様の試みを目指すものとして、その延長線上に置かれるものである。

本研究は、当初、フランス国立図書館所蔵の「レオナルド関連草稿」【*Léonard de Vinci I*, 224 ff. (*Introduction à la méthode de Léonard de Vinci*, ff. 1-105, *Note et Digression*, ff. 106-224. ), NAF 19054, Microfilm 4234.】の複写を日本ヴァレリー研究センター経由で依頼し、資料到着次第、同センターに赴いて『註と余談』草稿全体の解説および活字転写を行う計画であった。ところが、複数存在する著作権者の署名が完全に揃わないという予期せぬ事態によって複写が実現せず、結局、2004年3月に集中的な出張を組むことによって実地筆写を敢行せざるをえなかった。極めて短期間での筆写には、当然ながら、限界がある。長期にわたる綿密な解説作業を前提とすべき本研究も、こうした事情から不可避免的に、全体的な完全性を目指す方向から、部分的な紹介を目指す方向へと、大きくシフトせざるをえなかった。結果的に、本研究成果報告書では、より精密な草稿分析や問題点の指摘は今後の課題として先送りし、与えられた条件の範囲内で、『註と余談』草稿の主要な部分をひとまず紹介するという、いわば資料集に徹する形に落ち着いた。部分的とはいえ、ヴァレリーの散文の中でも一級の傑作である『註と余談』のテキスト読解に、生成研究の立場からいくらかの貢献ができるとすれば、望外の喜びである。

末尾ながら、予算緊縮化の状況下、本研究を遂行し、その成果の一端をこうして報告することができたのは、科学研究費補助金事業によるご支援のたまものであり、この場をお借りして、関係諸氏のご尽力に対し、厚く感謝申し上げる次第である。

平成 17 年 3 月

今井 勉

平成 15、16 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））による研究成果報告書  
ポール・ヴァレリー『註と余談』の生成研究（研究課題番号 15520143）

研究代表者

今井 勉（東北大学大学院文学研究科助教授）

交付決定額（配分額）

金額単位：千円

	直接経費	間接経費	合計
平成 15 年度	700	0	700
平成 16 年度	500	0	500
総計	1200	0	1200

## 目 次

序言	1
『註と余談』 関連草稿の構成と本報告書における紹介手順	4
冒頭部草稿群	6
ノンブルつき草稿群	16
結末部草稿群	60
『註と余談』 1919年版テキスト	67

## 『註と余談』 関連草稿の構成と本報告書における紹介手順

フランス国立図書館 (BNF) 西洋手稿部に所蔵されているヴァレリーの『註と余談』 *Note et Digressions* 関連手稿の全体 (手稿番号 NAF19054、マイクロフィルム番号 MF4234、« Léonard de Vinci I » 所収 ff.106-224.) は、以下のように整理されている。

- Premières ébauches de rédaction : ff. 107-110.
- Première rédaction du début du texte : ff. 111-121.
- Seconde rédaction du début du texte : ff. 122-129.
- Ebauche de la suite du texte : ff. 130-132.
- Suite du texte : ff. 133-174.
- Etat dactylographié du texte : ff. 175-191.
- Notes et brouillons : ff. 192-224.
  - contemporains du texte : ff. 192-220.
  - datant du début du siècle : ff. 221-224.

この資料全体の表紙にあたる f°106 は次のようになっている。

### f°106

P. V.

LEONARD DA VINCI  
NOTE & DIGRESSIONS

Mnss. Epreuves.

Bonnes Feuilles

Notes

右肩上に「P. V.」の署名があることから、この f° 106 はヴァレリー自身による記述と推定できる (司書による記述はすべてタイプ打ちによる紹介記述なので、この紙葉が司書によるものとは考えられない。また、時折、紙葉の裏側に JV の署名による鉛筆書きの註があり、刊行テキストとの照合や欠落部分の補加を行ったメモがある。この JV はヴァレリーの夫人 Jeannie Valéry であろうか)。ここで、注意が必要なのは、「Bonnes Feuilles」云々と記されている点である。つまり、この資料体は、『註と余談』に関連する草稿のすべてを漏れなく集めたものでは必ずしもなく、一部に若干の欠落があると考えるのが妥当である。ヴァ

レリーは常に細心の注意を払って自筆手稿を残しておくタイプの作家であるが、なんらかの事情（散逸・紛失など）によって、いくらかの漏れ落ちが生じるというのはありうることだろう。事実、この『註と余談』関連草稿においては、f°132 bis の司書による記述にもあるとおり、ヴァレリーによって紙葉の右肩上にノンブル打ちされたはずの頁6、7、8、15が存在せず（1から5、および、9から28まではノンブルつき紙葉が順に収録されているので、6、7、8があったはずだと考えるのはごく自然である）、また、刊行テキスト結末部 (§§25-27) に相当する箇所のノンブルつき紙葉もあってしかるべきと考えられるが、これも存在しない。このほか、ff. 175-191 のタイプ原稿 (Etat dactylographié du texte) も、刊行テキストの最初の三分の一をカバーしているに過ぎず不完全である（ただし、これについては、ヴァレリーが刊行テキストの最初の三分の一に相当する部分だけをタイプ打ちし、残りについてはタイプをしなかったという可能性もある）。このように、一部手稿の欠落が見られる点で、必ずしも完全とは言えない資料体ではあるが、全体として見れば、この資料体に収録された紙葉群は、執筆初期のいわゆる **premier jet** と考えられるメモから、刊行テキスト一步手前の清書稿と考えられるものまで、十分な充実度を示しており、作家ヴァレリーによる散文テキストの傑作『註と余談』の生成の舞台裏を伝える一級の資料であるということは間違いのない事実である。

以下、本報告書においては、上記のように整理されている関連草稿全体の構成順をほぼ忠実になぞるかたちで、まず第一に冒頭部草稿群、第二にノンブルつき草稿群、第三に結末部草稿群の順に、紹介していくことにしたい。今回の調査では十分な時間が確保できなかった ff. 175-191 のタイプ原稿、および、以上のカテゴリーから外れる細かなメモやノートを書いた紙葉に関しては、一部を除いて紹介を割愛する。なお、報告書末尾に、参考資料として、1919年版の『註と余談』テキストの全文を掲げておいた。草稿群と刊行テキストの比較対照作業の参考としていただければ幸いである。

フランス国立図書館西洋手稿部での筆写作业は、まず最初に、マイクロフィルムに基づく筆写作业をひととおり行ったのち、続いて、責任者の許可を得て、資料体の原本にあたって再度確認するという二段階で実行した。もとより、筆写は、いかに細心の注意を払っても、読み違いや読み落としなどの誤謬を完全に避けることは困難である。さらに、筆写ノートに基づいて、それを、パソコン上に活字転写する段階では、タイプミスの可能性に加え、手書きのアナログ空間を、活字という均質なデジタル空間に変換する作業に伴う不可避の本質的限界があることも事実である。こうした困難および限界の責任はすべて、作業に当たった今井の側にあることを、ここで改めてお断りしておくと同時に、『註と余談』関連草稿の解説に当たられる同学諸氏のご教示を切に願う次第である。

## 冒頭部草稿群

1895年の『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』の草稿においてもそうだったが、この1919年の『註と余談』においても、ヴァレリーは冒頭部の執筆に特別の力を注いでいるように思われる。以下、冒頭部数節に関連する紙葉を紹介する。刊行テキストの§1に相当する草稿は、後に掲げる ff. 122-124 を参照のこと。あらかじめ指摘しておくならば、冒頭部草稿には、二つの系列がある。ひとつは、刊行テキストの順番通りの系列（後の「ノンブルつき草稿群」に掲げる ff. 122-133）である。もうひとつは、以下に掲げる ff. 111-118 の系列である。後者は、刊行テキストの§§2-3 から始まり、途中の§§4-7 を飛ばして、いきなり§8 に至っている。おそらく、ヴァレリーは、まず、こちらの系列で執筆し、自らはレオナルドに「熱狂」していたが「熱狂は作家の魂の状態ではない」というテーマに絞った後、「博識」排除の姿勢を明確にした部分、すなわち、刊行テキスト§§6-7 に相当する ff.119-120 を書いた段階で、「Cet Apollon」で始まる刊行テキスト§4 に相当する部分を含む前者の系列へと加筆・展開したのではないかと推測される。

### 【凡例】（以下同様）

- ・削除して新たな表現を書き加えた場合→削除部分に横棒削除線を付し、それに続けて、書き加えた表現をそのまま並べて記載した（書き込み位置が上だったり下だったりするが煩雑なのでそれは反映しないことにした）。
- ・表現を消さずに別の表現を書き加えた場合→直後に「+」の印をつけて記載した。煩雑になって読みにくい場合は、書き加え部分を上付き処理の形で示した。
- ・読み取り不可能箇所は(illi.)で示した。該当箇所は一単語の場合もあれば数単語あるいは句や文の場合もあるが、煩雑になるので、今回は一括して(illi.)で示した。

f° 107 r° [箇条書き的なメモが多く、最初期の冒頭部草稿と考えられる。紙葉全体に大きく×印がつけられている。インクのにじみが多いため読み取れない箇所が多い。]

Ce petit essai doit ~~son~~ l'existence à Madame Juliette Adam qui voulut bien me demander en ~~1895~~ l'an 95 d'écrire quelques pages ~~de~~ sur Léonard.

Je crois que M. Léon Daudet ne fut pas étranger à cette (illi.). Je les remercie, l'une et l'autre. +Quoique j'eusse 23 Mon embarras fut grand. Léonard ne m'était connu que par mon enthousiasme d'un homme si maître de ses moyens intellectuels et qui me semblait avoir trouvé l'attitude centrale d'où les travaux de la science et ceux de l'art sont vus et possédés même ment. Mais je n'avais moi-même que les moindres instruments.

(illi.) de cette position, si c'était à refaire

d'apprécier -

Images - Je n'étais que

J'étais ivre d'idées, de curiosité, de désirs. - d'orgueil intellectuel partagé entre mes heures de lucidité apparente (illi.) et mes heures radicales impuissantes. Et (illi.) Léonard de mon propre esprit pour déjouer et se dépasser ses pouvoirs réguliers que je sentais infirme.

La divination était mon moyen. (illi.) J'ouvrais les savants (illi.) fut au dessein de mes connaissances (illi.)

Je ne (illi.) de les comprendre. Je les (illi.) ces livres et parfois le système succédait aussi bien à mon audace.

Ceci est un document.

la vie considérée comme exercice intérieur

KF // Je mets la vie illuminative raison Je voulus à toute force au dessin (illi.)

et je (illi.) ne sont que (illi.)

application d'un travail central, ayant (illi.)

f° 111 [2 のノンブルが打たれている。]

2

Ce petit essai doit l'existence à Madame Juliette Adam, qui vers la fin de l'an 94, sur le gracieux avis de M. Léon Daudet, voulut bien me le demander pour sa Nouvelle Revue.

Quoique j'eusse 23 ans, mon embarras fut immense. Je savais trop que je connaissais Léonard beaucoup moins que je ne l'admirais. Il est un personnage principal de cette



Comédie Intellectuelle qui n'a pas trouvé son poète, et qui serait pour mon goût bien plus précieuse encore que la Comédie Humaine, et même que la Divine Comédie. Je ~~pensais~~ sentais que ce maître de ses moyens, ce possesseur du dessin, des images, du calcul, avait trouvé l'attitude centrale à partir de laquelle les entreprises de la science et les actes de l'art sont également possibles, les ~~coups~~ échanges heureux également probables. Cette pensée est merveilleusement excitante. Si l'enseignement ~~de nos~~ des écoles n'était pas un système +compromis indéterminé d'âneries, une organisation sans objet connu ; et si l'on descendait à comprendre que ce n'est rien d'accumuler la matière d'un repas, qu'il faut se préoccuper de l'appétit, que sans lui rien ne profite, mais que, lui présent, le plus méchant des mets devient assimilable et rentre dans la vie, - on donnerait à la figure de Léonard la fonction de créer le désir, on en tirerait des motifs d'accepter les tâches ingrates, on enflammerait peut-être quelques adolescents que le caractère de Don Diègue, la prose de Sainte Beuve juxtaposés au trinôme du second degré et aux lois de la réfraction, n'arrivent pas à émouvoir : que nous importe ce que nous n'aurions pas inventé ? Et quel éducateur jamais s'est imaginé de communiquer et d'irriter le besoin, avant que d'entasser sous les regards désintéressés de ses ~~victimes~~ jeunes sujets +la jeunesse, les moyens de le satisfaire ? Faites avoir besoin +les désirer. Il faut tromper les (illi.) pour que quelque chose soit c'est peut-être le secret de l'univers sensible.

#### fr 112

Moi, je brûlais pour Léonard. Mais je trouvais indigne, et je le trouve encore, d'écrire par le seul enthousiasme. L'enthousiasme n'est pas un état d'âme d'écrivain, ~~mais de~~ ~~lecteur~~ incomplet. Quelle soit la puissance du feu, elle n'est utile et motrice que par des machines où (illi.)

L'art ~~ly~~ qui engage ; des gênes +obstacles bien calculées ~~font résistance~~ à la dissipation totale et ~~vaine~~ infructueuse, et le retard que l'on sait mettre au retour fatal de l'équilibre permet de soustraire quelque chose à la chute de cette ardeur.

#### fr 113

Moi, je brûlais pour Léonard. ~~La~~ Une grande soif sans doute, s'illustre de ruisselants objets, enfante des illusions ~~froides et liquides~~ glaciales de, diamante des cruches, + elle

agit sur je ne sais quelle substance de l'âme comme la lumière invincible sur le verre d'urane de Bohème, se peint l'opalescence de carafes : Mais ses breuvages ne sont que spécieux ; mais je trouvais indigne, et je le trouve encore, d'écrire par le seul enthousiasme. L'enthousiasme n'est pas un état d'âme d'écrivain. Quelle grande soit la puissance du feu, elle ne se fait utile et motrice que par les machines où l'art l'engage ; il faut que des gênes bien calculées fassent obstacle à sa dissipation totale et vaine, et que le retard adroitement opposé au retour ~~fatal~~ de l'équilibre permette de soustraire quelque chose à la chute infructueuse de l'ardeur.

Que faire, n'étant riche que de désir, tout ivre que l'on soit d'idées, de cupidité et d'orgueil intellectuels ? ~~Même~~ Davantage, j'adorais ~~vaguement~~ confusément et mais passionnément la précision ; et un amour était en moi de ce qui est plein et achevé des oeuvres exactement adaptées, qui n'ont aucun besoin de la bonne volonté d'autrui, qui ne comptent pas sur ses faiblesses, mais qui demandent plutôt sa résistance, sa malveillance même. – Mon seul bien positif était une ~~volonté de ne pas me satisfaire aisément~~ certaine lucidité,

insuffisant

Mais pensée immédiate, pensée sans valeur, pensée infiniment répandue

№ 114

Moi, je brûlais pour Léonard. Mais je trouvais indigne, et je le trouve encore, d'écrire par le seul enthousiasme. L'enthousiasme n'est pas un état d'âme d'écrivain. Quelle grande que soit la puissance du feu, elle ne se fait utile et motrice que par les machines où l'art l'engage ; il faut que des gênes bien placées fassent obstacle à sa dissipation totale et vaine, et qu'un retard adroitement opposé au retour invincible de l'équilibre permette de soustraire quelque chose à la chute infructueuse de l'ardeur. S'agit-il du discours, je suis ~~presque à la fois~~, le même tout ensemble, *source*, *ingénieur* et *matériaux*. L'un de ~~moi produit~~ est l'impulsion, ~~que l'~~ qu'un autre dirige ; et un troisième, logique et mémoire, l'assure ~~des matériaux~~ des relations indéformables, maintient les données, conserve les liaisons, prolonge l'existence de l'assemblage *voulu*. Ecrire, ~~est~~ ~~ici~~ n'est-ce pas construire le plus savamment et le plus ~~soigneusement du monde~~ élégamment qu'on le puisse cette machine ~~linguistique~~ de langage où la détente de l'esprit excité doit ~~se produire~~ vaincre, pour disputer +et qui interposée entre une émotion initiale et l'oubli, au désordre et au vague, aboutissements et issues fatales de

la pensée, le plus possible d'énergie utilisable à nouveau. L'être écrivain a pour ~~instinct~~ de s'opposer à soi-même ; il faut qu'il introduise des résistances à son propre mouvement.

Je ne ~~trouvais pas donc~~ voyais en moi que velléités et images. Que faire, n'étant riche que de désir, tout ivre que l'on soit d'idées, de cupidité et d'orgueil intellectuels ? ~~Une grande soif, sans doute, Mon seul bien positif était une certaine sensation~~

impuissances – hasards

Mais - Soif –

Lucidité

Opérations nettes

Admirable écuyer de la structure

[他メモ数行あり (illi.)]

[これに続く紙葉は内容的に f° 117 と考えられるので、次にこれを示す。]

## f° 117

Je ne trouvais pas en moi ces résistances que je demande à l'écrivain d'opposer à son ~~propre~~ mouvement. Je n'y voyais que velléités et ~~images~~ possibilités. Que faire, n'étant riche que de désir, tout ivre que l'on soit d'idées, de cupidité et d'orgueil intellectuels ? Davantage, j'adorais confusément, mais passionnément, la précision. Je ne croyais pas à la nécessité de l'ignorance, à la puissance du délire, aux aveugles clartés, à l'incohérence créatrice : Léonard est excellent contre ces ~~bêtises~~ faiblesses. Il ~~empêche~~ de confondre les moments différents de l'action, les uns avec les autres, ni les phases d'une génération, ~~entre elles~~ Entre le trouble ~~d'un~~ de l'amour et la perfection de l'être vivant qui peut s'ensuivre, se placent des travaux et des jours.

Mon seul bien positif ~~était~~ étant une certaine lucidité qui répondait à des images absolues par des sentences impitoyables. J'étais équitablement partagé ~~entre l'obscur la clarté du désir, l'obscurité des noyaux.~~

Je ne les ~~pas en moi~~ trouvais pas en moi. Je ~~n'en~~ n'y trouvais que le sentiment de leur absence. Je n'y voyais que velléités, possibilités, facilité dégoûtante. Si je commençais de jeter les dés sur la page blanche, je n'amenais que les mots témoins de l'impuissance des pensées : *génie, admirable, prodigieux*. Ces ~~termes~~ attributs qui renseignent peu sur la chose, beaucoup sur l'auteur ~~l'insuffisance de l'auteur.~~

Pour comble ~~de malheur~~ de tourment, je ne savais pas me tromper

[数行のメモがあるが、はっきりと読み取れる部分が少ない。]

ƒ° 115 [3 のノンブルが打たれている。]

3

Mais pensée trop immédiate, - pensée sans valeur, - pensée infiniment répandue,- et pensée bonne pour parler, non pour écrire. Brûler pour un beau sujet, c'est peu devant le papier. Une grande soif, sans doute, s'illustre elle même de ruisselantes visions ; elle agit sur je ne sais quelles substances de l'âme comme fait la lumière invincible sur le verre d'urane ; elle éclaire ce qu'elle attend, enfante des illusions graciales, diamante des cruches, se peint l'opalescence de carafes... Mais ces breuvages qu'elle se frappe ne sont que spécieux ; mais je trouvais indigne, et je le trouve encore, d'écrire par le seul enthousiasme. L'enthousiasme n'est pas un état d'âme d'écrivain. Quelle grande que soit la puissance du feu, elle ~~ne se fait utile~~ et motrice que par les machines où l'art l'engage : il faut que des gênes bien placées fassent obstacle à sa dissipation totale, et qu'un retard adroitement opposé au retour invincible de l'équilibre, permette de soustraire quelque chose à la chute infructueuse de l'ardeur. S'agit-il du discours, l'auteur qui le prépare, se sent être tout ensemble *source, ingénieur* et *matériaux*. L'un de lui est l'impulsion ; l'autre prévoit, dirige, compose ; un troisième, logique et mémoire, maintient les données, conserve les liaisons, assure quelque durée à l'assemblage *voulu*... Ecrire, n'est-ce pas, construire le plus solidement et le plus exactement qu'on le puisse, construire cette machine de langage où la détente de l'esprit excité doit vaincre des résistances *réelles* ; et qui, interposée entre une émotion initiale et ces aboutissements, que sont l'oubli, le désordre et le vague, issues fatales de la pensée, leur dispute un peu d'action et d'existence séparée ? Etre écrivain, je pense, c'est savoir trouver ~~en soi~~ ces résistances qui permettent qu'on s'avance contre son premier mouvement.

ƒ° 116 [これも 3 のノンブルが打たれている。ƒ° 115 のヴァリエント。]

3

Mais pensée trop immédiate, - pensée sans valeur, - pensée infiniment répandue,- et pensée bonne pour parler, non pour écrire.

×

× ×

( Brûler pour un beau sujet, c'est peu devant le papier ! Et que faire, n'étant riche que de désir, tout ivre que l'on soit d'idées, de cupidité et d'orgueil intellectuels ? Se monter

la tête ? Se donner une fièvre littéraire, en cultiver le délire ? Une Toute grande soif, sans doute, s'illustre elle même de ruisselantes visions ; elle agit sur je ne sais quelles substances secrètes comme fait la lumière invincible sur le verre d'urane ; elle éclaire ce qu'elle attend, enfante des illusions délicieusement graciales, diamante des cruches, se peint l'opalescence de carafes... Mais ces breuvages qu'elle se frappe ne sont que spécieux ; mais je trouvais indigne, et je le trouve encore, d'écrire par le seul enthousiasme. L'enthousiasme n'est pas un état d'âme d'écrivain. Il contribue à exagérer le défaut de toute littérature, de ne satisfaire jamais l'*ensemble* des foncions de la pensée. Quelle grande que soit la puissance du feu, elle ne devient utile et motrice que par les machines où l'art l'engage : il faut que des gênes bien placées fassent obstacle à sa dissipation totale, et qu'un retard adroitement opposé au retour invincible de l'équilibre, permette de soustraire quelque chose à la chute infructueuse de l'ardeur. S'agit-il du discours, l'auteur qui le prépare, ~~se doit~~ d'être tout ensemble *source*, *ingénieur* et *contraintes*. L'un de lui est l'impulsion ; l'autre prévoit, dirige, compose, supprime ; un troisième, logique et mémoire, maintient les données, conserve les liaisons, assure quelque durée à l'assemblage *voulu*...

[<sup>o</sup> 116 に直接つながる紙葉は <sup>o</sup> 117 ではなく <sup>o</sup> 118 であると思われる。<sup>o</sup> 117 は <sup>o</sup> 114 につながる紙葉と考えられる。事実、<sup>o</sup> 118 には紙葉右肩に 4 のノンブルが打たれている。<sup>o</sup> 118 には実は 4 の左隣に 6 のノンブルも打たれているが、これは、あとに示す、ノンブルつき草稿群の中で欠けている 6, 7, 8 のうちの 6 に相当する紙葉である可能性がある。おそらく、最初が 4 で、その後、6 に変わったものと思われる。4 から 6 へ変わったのは、冒頭部草稿の二種類の系列の存在から説明できるのではないか。]

**<sup>o</sup> 118** [4 および 6 の二つのノンブルが打たれている。]

6 4

Ecrire, n'est-ce pas, le plus solidement et le plus exactement qu'on le puisse, construire cette machine de langage où la détente de l'esprit excité doit vaincre des résistances *réelles* ? Etre écrivain, n'est-ce pas s'opposer utilement à soi-même ; savoir y introduire les contrariétés qui, interposées entre une émotion ou volonté initiale, et ces aboutissements que sont l'oubli, le désordre et le vague, ( issues fatales de la pensée, ) leur disputent un peu d'action renouvelable et d'existence indépendante ?

- On dit d'un bel écuyer qu'il ne faut qu'un avec sa monture ; on peut dire le même d'un virtuose avec son violon. Mais c'est le contraire qu'il faudrait dire de l'écrivain, et ce contraire le distingue de l'orateur.

×  
× ×

Je ne trouvais pas en moi ces conditions, ces obstacles comparables à des forces extérieures, qui permettent qu'on avance contre son premier mouvement. Je n'y trouvais que velléités, possibilités, facilité dégoûtante ; toute une richesse involontaire, vaine comme celle des rêves. C'est l'infini des choses usées...

Si je commençais de jeter les dés sur une page blanche, je n'amenais que les mots témoins de l'impuissance de la pensée : *génie, charme, admirable, prodige...* ~~Tous ces~~ attributs qui conviennent à tout, renseignent peu sur leur sujet, beaucoup sur la personne qui parle. Ils excitaient ma colère.

Pour comble de tourment, je ne savais pas me leurrer ; et si promptement je répondais par mes sentences impitoyables à mes images absolues que la somme de mes réflexions, à chaque instant, était nulle. J'adorais confusément mais passionnément la précision.

#### f° 118 bis

Je sentais bien qu'il faut impitoyablement que notre esprit compte sur ses hasards ; ~~car~~ ses attentes sont ~~ou~~ fantastiques ou vides, ~~et car~~ ses opérations volontaires et régulières ne sont utiles qu'*après coup*. Mais je ne croyais pas à la puissance du délire, à la nécessité de l'ignorance, aux éclairs de l'absurde, à l'incohérence créatrice.

Léonard est excellent contre ces bêtises. Parmi tant d'idoles que nous avons à choisir, puisqu'il faut adorer au moins une, ~~il semble qu'il ait adopté~~ cette Rigueur Obstinée ~~qui est après tout, la plus délaissée~~ la moins ~~informe~~ barbare de toutes, et ~~la plus haïe de~~ + donc celle que toutes les autres ~~haïssent~~ s'accordent pour haïr. L'espèce de platonicien qui était en lui et l'espèce de naturaliste se ~~compensaient, sous la domination permanente de~~ composaient la netteté de son attention. J'imagine que pour un tel regard, tout objet, ~~soit~~ qu'il soit défini par l'usage ou qu'il le soit par un acte spécial de l'observateur, était perçu comme une solution particulière de quelque problème, mais représentait, d'autre part, le résultat, le signe, l'élément d'une complexité infinie. Il apparaît alors que toute intuition est doublement incapable de nous donner une connaissance de cet objet : d'une part elle est toujours en défaut du côté de l'exactitude on devine par une constante physique ; d'autre part la complexité infinie permet toujours de mettre en insuffisance toute intuition d'une chose. Cette intuition n'est donc qu'un événement limité, un commencement.

¶ 119 [刊行テキストの§6 に相当する草稿。]

Ni je n'étais pas assez savant pour songer à m'avancer dans le détail de ses recherches, — essayer, par exemple, de déterminer le sens précis de cet *Impeto* dont il fait tant usage dans sa dynamique ; ou dissenter de ce *Sfumato* qu'il a poursuivi dans sa peinture - ; ni je ne me trouvais assez érudit, (et moins encore, porté à l'être), pour penser à contribuer ~~le moins au moins du monde~~ au pur accroissement des faits déjà connus. Et puis, je ne me sentais pas pour l'érudition toute l'estime qui lui est due. L'étonnante conversation de Marcel Schwob me gagnait à son propre charme plus qu'à ses sources. Je buvais tant qu'elle durait. J'avais le plaisir sans la peine. Mais enfin, je me réveillais. Ma paresse se redressait contre les lectures ~~minutieuses~~ désespérantes, les recensions infinies et les méthodes scrupuleuses qui préservent de la certitude. Je disais à mon ami que les savants hommes courent bien plus de risques que les autres, puisqu'ils font des paris là où nous restons hors du jeu, et qu'ils ont deux manières de se tromper : la nôtre qui est commune, et la leur. S'ils ont le malheur de restituer les événements, le nombre même des vérités matérielles rétablies met dans le plus grand danger des vérités plus importantes. Les documents nous renseignent avec une sorte d'impartialité aveugle sur la règle et sur l'exception. Ils préfèrent même ~~nous conserver~~ les exceptions. Mais tout ce qui est vrai d'une époque ou d'un individu ne sert pas toujours à les mieux connaître. Une personne n'est pas identique au total exact de ses ~~actions~~ apparences. Tantôt l'imitation, tantôt le lapsus et l'~~occasion~~ l'accident, tantôt une lassitude ~~même~~ d'être précisément celui qu'on est, altèrent pour un moment celui-là même. Un hasard fait passer ce moment à la postérité tout habitée d'érudits, et nous passons à jamais pour un personnage

¶ 120 [¶ 119 の続き。刊行テキストの§6 の末尾から§7 に相当する草稿。]

qui nous étonnerait ~~beaucoup~~. Un visage qui fait la grimace, si on le photographie dans cet état, c'est un document irrécusable. Mais montrez-le aux ~~meilleurs~~ amis du modèle, ils n'y reconnaissent personne.

J'avais bien d'autres sophismes à la discrétion de mes dégoûts. La répugnance à de longs labeurs est excessivement persuasive.

En particulier, j'inclinai + j'arrivais à un système que voici : déduire des oeuvres de l'homme, à l'exclusion des anecdotes, des amours, des aventures... un être psychologique

ou théorique purement capable de ces oeuvres.

Fantoches pour fantôme, je préférerais essayer le fantoche qui du moins nous oblige à réfléchir sur raisonner un peu de son modeste fonctionnement.

[全体にメモが多く、いずれも斜線や横線などが引かれている]

## ƒ° 121

La soif de vaincre, la soif de connaître, la soif de pouvoir, qui manifeste les besoins vitaux de cette plante espèce, la divisent en hydre indéfinie, l'épuisent en précision, en ténuité, en éloignement et en replis. Elle se prolonge, elle s'enmêle, elle se perd dans ce qu'elle est.

×  
× ×

Ce n'est pas que toute chaque personne humaine s'approfondissent au point que je désigne, et jusqu'à s'égarer dans la complexité qui lui appartient. Cette inquiétude, tous la subissent et la connaissent par de méchantes heures et de redoutables travaux involontaires ; quelques-uns seulement se la perçoivent et lentement même de l'ordonner.

Voici donc

Loi Il semblait que l'être a pour loi d'être unique



## ノンブルつき草稿群

『註と余談』草稿冊子には、主として右肩（時に左肩）に頁番号がノンブル打ちされている紙葉が数多く存在する。明確に頁のノンブル付けと判断されるものは1番から28番まで存在する（ただし、前述のように、(6)、7、8、15は存在しない）。f° 111, ff. 115-116, f° 118, ff. 123-173がそれである（これ以外にも、結末部草稿群の中に29, 31, 33といった数字が見えるが、刊行テキストに近い状態の紙葉は存在しない）。これらのノンブルは、インクや筆跡の状態などから見て、執筆者ヴァレリー自身によって記されたものと判断できる。ノンブルつき草稿の大半は、比較的大きな、判読しやすい字体で書かれている。加筆・削除・訂正の多い紙葉も若干あるが、ほとんど訂正のない清書稿と言っていいような紙葉も多い（f° 106に記されていた *Bonnes Feuilles* はまさにこれらの紙葉群にふさわしい名称である）。特徴的なのは、同じノンブルが複数存在している、すなわち、同じ箇所が数度にわたって書き直されている場合が多いという事実である。結果として、各紙葉のテキストは必ずしも常に明確に連続しているとは限らず、先行する紙葉のテキストの途中から再度書き始め、重複部分を含んで *chevaucher* の状態を示したり、あるいは、数行分が飛んでいたりという場合もしばしば見られ、『註と余談』草稿群の執筆順序の特定をやや複雑にする要因となっている。

ともかく、全体的に見て、これらのノンブルつきの紙葉群は、1919年版刊行テキストに極めて近い段階であることは確実と思われる。生成論的には、萌芽状態を示すメモから遥かに進んで、完成原稿（刊行テキスト）に近い段階を示す資料であり、その限りでは、ノンブルつき草稿群の全体を読むことに、さして大きな意味はないという見方も当然出来るだろう。しかし、刊行テキストの解釈レベルで難解と感じられる部分の多い『註と余談』のテキスト読解に直接的に役立つ情報も多いのではないかと思われる。ここでは、そのような判断に基づいて、ノンブルつき草稿群全体の網羅的な提示を試みたい。提示に当たっては、ノンブルつきでなくても、ノンブルつき草稿との連続性が明らかな紙葉については、あわせて紹介することにした。また、ノンブルつき草稿は、先に掲げた「冒頭部草稿群」の中にも数葉含まれていたもので、重複をいとわず、あえて、この項目においても、適宜、挿入することにした。

♫ 122 [ノンブルはないが、1のノンブルを持つ ♫ 123 および ♫ 124 の直前のヴァリエーションである。]

Il me faut excuser d'un titre si ambitieux et si véritablement trompeur que celui-ci. Je n'avais pas le ~~dessein~~ sentiment d'en imposer quand je l'ai mis sur ces pages ; mais il y a vingt-cinq ans que je l'y ai mis, et après le quart d'un siècle, il faut bien se désavouer quelque peu : le titre avantageux serait donc adouci. Quant au texte... Mais le texte, on ne l'écrirait même pas. *Impossible !* dirait maintenant la raison. Arrivé au N<sup>me</sup> coup de la partie d'échecs que joue la connaissance avec l'être, on se flatte d'être instruit par l'adversaire ; on devient dur + difficile pour son passé, on y trouve des décisions inexplicables, on reconstitue sa naïveté... C'est se faire plus sot qu'on ne l'a jamais été ; mais sot par nécessité, sot par raison d'Etat ; il n'est peut-être pas de tentation plus forte que celle du reniement de soi-même, car le jour est jaloux des jours, la pensée se défend désespérément d'avoir été (sic), la clarté du moment ne veut pas illuminer ~~dans~~ le temps, au passé des moments plus clairs qu'elle-même ; et les premières paroles que fait le contact du soleil levant ~~avec~~ au le cerveau qui s'éveille ~~fait~~ balbutier à ce Memnon, souvent aussi : *Nihil reputare actum...*

Relire, donc, relire après l'oubli, -se relire sans ombre de tendresse, sans paternité d'un oeil tout étranger, avec défiance, froideur, présence logique, attente créatrice du ridicule ou de l'erreur, - c'est refaire, ou pressentir que l'on referait très différemment ce travail.

♫ 123

1

Berlioz

Il me faut excuser d'un titre si ambitieux et si véritablement trompeur que celui-ci. Je n'avais pas le dessein d'en imposer, quand je l'ai mis sur ces pages ; mais il y a vingt-cinq ans que je l'y ai mis, et après le quart d'un siècle, ~~il faut bien se désavouer quelque peu~~ il me semble je le trouve un peu fort : le titre avantageux serait donc adouci. Quant au texte... Mais le texte, on ne songerait même pas à l'écrire. *Impossible !* dirait maintenant la ~~raison~~ froideur. Arrivé au N<sup>me</sup> coup de la partie d'échecs que joue la connaissance avec l'être, on se flatte d'être instruit par l'adversaire ; on devient dur pour ce jeune homme qu'il faut bien souffrir d'avoir comme aïeul ; on lui trouve des faiblesses inexplicables qui furent ses audaces ; on reconstitue sa naïveté. C'est là se faire plus sot qu'on ne l'a jamais été ; mais sot par nécessité, sot par raison d'Etat. Il n'est peut-être pas de tentation plus constante ni de plus intime que celle du reniement

de soi-même ; chaque jour est jaloux des jours, la pensée se défend désespérément d'avoir été plus forte, la clarté du moment ne veut pas illuminer au passé de moments plus clairs qu'elle-même ; et les premières paroles que le contact ~~du soleil levant~~ de la lumière fait balbutier au cerveau qui se réveille, sonnent ainsi dans ce Memnon : *Nihil reputare actum...*

Relire, donc, relire après l'oubli, -se relire, sans ombre de tendresse, sans paternité, l'œil ~~tout~~ étranger, avec défiance, ~~froideur-tension~~ acuité critique, attente terriblement créatrice de ridicule ou de mépris, - c'est refaire, ou pressentir que l'on referait, très différemment son travail. Viser l. Le sujet

[冒頭部草稿群で既に紹介した ƒ 111 には 2 のノンブルが打たれており、内容的に ƒ 123 と連続している可能性を考慮して、ここに再度紹介しておく。]

## ƒ 111

2

Ce petit essai doit l'existence à Madame Juliette Adam, qui vers la fin de l'an 94, sur le gracieux avis de M. Léon Daudet, voulut bien me le demander pour sa Nouvelle Revue.

Quoique j'eusse 23 ans, mon embarras fut immense. Je savais trop que je connaissais Léonard beaucoup moins que je ne l'admirais. Il est un personnage principal de cette Comédie Intellectuelle qui n'a pas trouvé son poète, et qui serait pour mon goût bien plus précieuse encore que la Comédie Humaine, et même que la Divine Comédie. Je ~~pensais~~ sentais que ce maître de ses moyens, ce possesseur du dessin, des images, du calcul, avait trouvé l'attitude centrale à partir de laquelle les entreprises de la science et les actes de l'art sont également possibles, les ~~œuvres~~ échanges heureux également probables. Cette pensée est merveilleusement excitante. Si l'enseignement ~~de nos~~ des écoles n'était pas un système +compromis indéterminé d'âneries, une organisation sans objet connu ; et si l'on descendait à comprendre que ce n'est rien d'accumuler la matière d'un repas, qu'il faut se préoccuper de l'appétit, que sans lui rien ne profite, mais que, lui présent, le plus méchant des mets devient assimilable et rentre dans la vie, - on donnerait à la figure de Léonard la fonction de créer le désir, on en tirerait des motifs d'accepter les tâches ingrates, on enflammerait peut-être quelques adolescents que le caractère de Don Diègue, la prose de Sainte Beuve juxtaposés au trinôme du second degré et aux lois de la réfraction, n'arrivent pas à émouvoir : que nous importe ce que nous n'aurions pas inventé ? Et quel éducateur jamais s'est imaginé de communiquer et

d'irriter le besoin, avant que d'entasser sous les regards désintéressés de ses ~~victimes~~ jeunes sujets +la jeunesse, les moyens de le satisfaire ? Faites avoir besoin +les désirer. Il faut tromper les (illi.) pour que quelque chose soit c'est peut-être le secret de l'univers sensible.

#### f° 124

1

Il me faut excuser d'un titre si ambitieux et si véritablement trompeur que celui-ci. Je n'avais pas le dessein d'en imposer, quand je l'ai mis sur ce petit ouvrage ; mais il y a vingt-cinq ans que je l'y ai mis, et après ce long refroidissement +détachement, je le trouve un peu fort : le titre avantageux serait donc adouci. Quant au texte... Mais le texte, on ne songerait même pas à l'écrire. *Impossible !* dirait maintenant la raison. Arrivé au N<sup>me</sup> coup de la partie d'échecs que joue la connaissance avec l'être, on se flatte d'être instruit par l'adversaire ; on devient dur pour ce jeune homme qu'il faut bien souffrir d'avoir comme aïeul ; on reconstitue sa naïveté. C'est là se faire plus sot qu'on ne l'a jamais été ; mais sot par nécessité, sot par raison d'Etat. Il n'est peut-être pas de tentation plus constante, ni de plus intime, peut-être, que celle du reniement de soi-même : chaque jour est jaloux des jours ; la pensée se défend désespérément d'avoir été plus forte ; la clarté du moment ne veut pas illuminer au passé de moments plus clairs qu'elle-même ; et les premières paroles que le contact du soleil fait balbutier au cerveau qui se réveille, sonnent ainsi dans ce Memnon : *Nihil reputare actum...*

Relire, donc, - relire après l'oubli, - *se* relire, sans ombre de tendresse, sans paternité ; avec froideur, acuité critique, attente

#### f° 125

2

terriblement créatrice de ricanerie ou de mépris, l'oeil tout étranger et destructeur, - c'est refaire, ou pressentir que l'on refait, bien différemment, son travail.

L'objet en vaudrait la peine. Mais il n'a pas cessé d'être au dessus de mes forces. Aussi bien je n'ai jamais rêvé de m'y attaquer. Ce petit essai doit son existence à Madame Juliette Adam, qui, vers la fin de l'an 94, sur le gracieux avis de M. Léon Daudet, voulut bien me le demander pour sa Nouvelle Revue.

×  
× ×

Quoique j'eusse vingt-trois ans, mon embarras fut immense. Je savais trop que je connaissais Léonard beaucoup moins que je ne l'admirais. Il me paraissait un personnage principal de cette *Comédie Intellectuelle* qui n'a pas trouvé son poète, et qui serait pour mon goût bien plus précieuse encore que la *Comédie Humaine* et même que la *Divine Comédie*. Je sentais que ce maître de ses moyens, ce possesseur du dessein, des images, du calcul, avait trouvé l'attitude centrale à partir de laquelle les entreprises de la science et les actes de l'art sont également possibles, les échanges heureux également probables : pensée merveilleusement excitante (1)

(1) ( Si l'enseignement des écoles n'était pas un système indéterminé de compromis entre le tout et le rien, une organisation sans objet connu ; et si l'on descendait à comprendre que ce n'est rien d'accumuler la matière d'un repas ; qu'il faut s'occuper de l'appétit ; que, sans lui, rien ne profite ; mais que, lui présent, il n'est pas de bas morceau, de corne dure, qui ne devienne assimilable et ne rentre dans la vie, - on y invoquerait la figure prodigieuse de Léonard, on lui donnerait la fonction de créer le désir, on en tirerait des raisons d'accepter les tâches ingrates : on enflammerait peut-être quelques adolescents que le caractère de Don Diègue, la prose de Sainte Beuve, juxtaposés au trinôme du second degré et aux lois de la réfraction n'arrivent pas à émouvoir : leur ennui est légitime. Ceux qui le leur reprochent sont des hommes qui ont enfin trouvé un but à leur travail, et ils aiment leur but. Mais ces enfants ne voient que ce qu'ils voient. Que nous importe ce que nous n'aurions ~~jamais~~ jamais pas inventé ? Et quel éducateur jamais s'est imaginé de communiquer ou d'irriter le besoin, avant que d'entasser, sous les regards désintéressés de la jeunesse, les moyens de la satisfaire ? Faites désirer.)

[冒頭部草稿群の紹介で示したように、冒頭部草稿には二つの系列がある。刊行テキスト通りに Cet Apollon に続くパターンと、§§2-3 から§8 に飛ぶパターンの二つである。この後者、すなわち、ff. 115-116 にも、ノンブル 3 が打たれており、内容的に f° 125 と連続している可能性を考慮して、ここに再度紹介しておく。]

## f° 115

3

Mais pensée trop immédiate, - pensée sans valeur, - pensée infiniment répandue, - pensée bonne pour parler, non pour écrire. Brûler pour un beau sujet, c'est peu devant le papier. Une grande soif, sans doute, s'illustre elle même de ruisselantes visions ; elle

agit sur je ne sais quelles substances de l'âme comme fait la lumière invincible sur le verre d'urane ; elle éclaire ce qu'elle attend, enfante des illusions graciales, diamante des cruches, se peint l'opalescence de carafes... Mais ces breuvages qu'elle se frappe ne sont que spécieux ; mais je trouvais indigne, et je le trouve encore, d'écrire par le seul enthousiasme. L'enthousiasme n'est pas un état d'âme d'écrivain. Quelle grande que soit la puissance du feu, elle ~~ne se fait utile~~ et motrice que par les machines où l'art l'engage : il faut que des gênes bien placées fassent obstacle à sa dissipation totale, et qu'un retard adroitement opposé au retour invincible de l'équilibre, permette de soustraire quelque chose à la chute infructueuse de l'ardeur. S'agit-il du discours, l'auteur qui le prépare, se sent être tout ensemble *source, ingénieur* et *matériaux*. L'un de lui est l'impulsion ; l'autre prévoit, dirige, compose ; un troisième, logique et mémoire, maintient les données, conserve les liaisons, assure quelque durée à l'assemblage *voulu*... Ecrire, n'est-ce pas, construire le plus solidement et le plus exactement qu'on le puisse, construire cette machine de langage où la détente de l'esprit excité doit vaincre des résistances *réelles* ; et qui, interposée entre une émotion initiale et ces aboutissements, que sont l'oubli, le désordre et le vague, issues fatales de la pensée, leur dispute un peu d'action et d'existence séparée ? Etre écrivain, je pense, c'est savoir trouver ~~en soi~~ ces résistances qui permettent qu'on s'avance contre son premier mouvement.

fr 116

3

Mais pensée trop immédiate, - pensée sans valeur, - pensée infiniment répandue, - et pensée bonne pour parler, non pour écrire.

×

× ×

( Brûler pour un beau sujet, c'est peu devant le papier ! Et que faire, n'étant riche que de désir, tout ivre que l'on soit d'idées, de cupidité et d'orgueil intellectuels ? Se monter la tête ? Se donner une fièvre littéraire, en cultiver le délire ? ~~Une~~ Toute grande soif, sans doute, s'illustre elle même de ruisselantes visions ; elle agit sur je ne sais quelles substances secrètes comme fait la lumière invincible sur le verre d'urane ; elle éclaire ce qu'elle attend, enfante des illusions délicieusement graciales, diamante des cruches, se peint l'opalescence de carafes... Mais ces breuvages qu'elle se frappe ne sont que spécieux ; mais je trouvais indigne, et je le trouve encore, d'écrire par le seul enthousiasme. L'enthousiasme n'est pas un état d'âme d'écrivain. Il contribue à

exagérer le défaut de toute littérature, de ne satisfaire jamais l'*ensemble* des fonctions de la pensée. Quelle grande que soit la puissance du feu, elle ne devient utile et motrice que par les machines où l'art l'engage : il faut que des gênes bien placées fassent obstacle à sa dissipation totale, et qu'un retard adroitement opposé au retour invincible de l'équilibre, permette de soustraire quelque chose à la chute infructueuse de l'ardeur. S'agit-il du discours, l'auteur qui le prépare, ~~se doit~~ d'être tout ensemble *source*, *ingénieur* et *contraintes*. L'un de lui est l'impulsion ; l'autre prévoit, dirige, compose, supprime ; un troisième, logique et mémoire, maintient les données, conserve les liaisons, assure quelque durée à l'assemblage *voulu*...

## fr 126

3

Mais pensée trop immédiate, - pensée sans valeur, - pensée infiniment répandue, - et pensée bonne pour parler, non pour écrire.

×  
× ×

Cet Apollon me ravissait au plus haut degré de moi-même. ~~Si mal que je le connaisse, ses dessins, ses manuscrits m'avaient comme ébloui.~~ Jamais pour Dyonisos, ennemi plus authentique, ni plus ~~pur~~ délibéré, ni plus libre, ni ~~mieux~~ si armé de tant lumière, que héros moins occupé de plier et de rompre les monstres que d'en considérer les ressorts ; ~~et qui,~~ comme dédaigneux de les percer de flèches ~~quand~~ puisqu'il osait les pénétrer de ses questions, ~~(illi.) qu'il n'est pas sur eux de victoire plus complète que de les comprendre,~~ et une fois saisi leur principe, que peut-être de songer même à les reproduire, pour les abandonner enfin dérisoirement réduits à l'humble condition de ces très particuliers et de paradoxes expliqués. Si ~~mal~~ médiocrement que je le connaisse, ses dessins, ses manuscrits m'avaient comme ébloui. Milliers de notes et de croquis, ce sont les milliers d'étincelles arrachées par les coups les plus divers ~~et les~~ que prodigués à une fantastique fabrication.

Quoi de plus séduisant +étonnant qu'un dieu qui repousse le mystère ? qui veut éclairer jusqu'à ses miracles ? Ces ~~choses qui ne s'adressaient~~ après tout qu'aux parties les plus ~~inférieures~~ naïves de notre être réelles de notre sens qui l'étonnent, qui tendent à paralyser nos ..., qui agissent sur nous. qui produit la surprise (illi.)

Maximes, théorèmes, recettes, définition, parfois un mot, parfois il se parle et se tutoie : ces milliers etc.

Mais, je n'avais nulle envie de redire

**fr 127**

3

Mais pensée trop immédiate, - pensée sans valeur, - pensée infiniment répandue, - et pensée bonne pour parler, non pour écrire.

×  
× ×

Cet Apollon me ravissait au plus haut degré de moi-même. Quoi de plus séduisant qu'un dieu qui repousse le mystère, qui ne fonde pas sa puissance sur les troubles de notre sens ; qui ne s'adresse pas ses prestiges au plus obscur, au plus tendre, au plus sinistre de l'être ; qui nous force de convenir et non de ployer ? dont le miracle est de s'éclaircir, et la profondeur, une perspective bien déduite ? Est-il meilleure marque d'un pouvoir authentique et légitime que de ne pas s'exercer sous un voile ? Jamais pour Dyonisos, ennemi plus délibéré, ni armé de tant de lumière, que ce héros moins occupé de plier et de rompre les monstres que d'en considérer les ressorts ; dédaigneux de les percer de flèches, puisqu'il les pénétrait de ses questions, il enseigne +signifie n'être pas sur eux de victoire plus complète que de les comprendre ; une fois saisi leur principe, il les peut abandonner, dérisoirement réduits à l'humble condition de ces très particuliers et de paradoxes expliquables.

Si légèrement que j'eusse étudié, ses dessins, ses manuscrits m'avaient comme ébloui. De ces milliers de croquis et de notes, je gardais l'impression extraordinaire d'un ensemble hallucinant d'étincelles arrachées par les coups les plus divers à quelque fantastique fabrication. Maximes, recettes, définitions, essai d'un raisonnement qui se reprend ; parfois un mot ; parfois il se parle et se tutoie..

Mais, je n'avais nulle envie de redire qu'il fut ceci et cela ; et géomètre et peintre et .. Et d'un mot, - l'artiste du monde même.

**fr 128**

4

fabrication. Maximes, recettes, conseil à soi, essais d'un raisonnement qui se reprend ; parfois un mot ; parfois il se parle et se tutoie..

Mais je n'avais nulle envie de redire qu'il fut ceci et cela ; et peintre et géomètre et..

Et d'un mot, - l'artiste du monde même. Nul ne l'ignore.

×  
× ×



Je n'étais pas assez savant pour songer à développer le détail de ses recherches, — (essayer, par exemple, de déterminer le sens précis de cet *Impeto*, dont il fait si grand usage dans sa dynamique ; ou dissenter de ce *Sfumato* qu'il a poursuivi dans sa peinture) ; ni je ne me trouvais assez érudit (et moins encore, porté à l'être), pour penser à contribuer, de si peu que ce fût, au pur accroissement des faits déjà connus. Je ne me sentais pas pour l'érudition toute l'estime qui lui est due. L'étonnante conversation de Marcel Schwob me gagnait à son charme propre plus qu'à ses sources. Je buvais tant qu'elle durait ; j'avais le plaisir sans la peine. Mais enfin je me réveillais. Ma paresse se redressait contre l'idée des lectures désespérantes, des recensions infinies, et des méthodes scrupuleuses qui préservent de la certitude. Je disais à mon ami que de savants hommes courent bien plus de risques que les autres, puisqu'ils font des paris et que nous restons hors du jeu ; et qu'ils ont deux manières de se tromper : la nôtre, qui est ~~commune~~ aisée, et la leur, laborieuse. S'ils ont le bonheur de nous rendre quelques événements, le nombre même des vérités matérielles rétablies met en danger la réalité que nous cherchons. Les documents nous renseignent, avec une sorte d'impartialité, sur la règle et sur l'exception. Un chroniqueur préfère souvent de nous conserver les singularités de son époque. Mais tout ce qui est vrai d'une époque ou d'un ~~homme~~ personnage ne sert pas toujours à les mieux connaître. Nul n'est identique au total

fr 129

5

exact de ses apparences : qui d'entre nous n'a pas fait, et qui n'a pas dit quelque chose qui n'est pas *sienne*? Tantôt l'imitation, tantôt le lapsus, ou l'occasion, — ou la seule lassitude accumulée d'être précisément celui qu'on est - altèrent pour un moment celui-là même. ~~Quelque~~ Le hasard fait passer ce moment à la postérité, tout habitée d'érudits. On nous croque pendant un dîner, et nous passerons à jamais pour un personnage qui nous ~~étonnerait beaucoup~~ ~~Votre~~ Un visage faisant la grimace, si on le photographie dans cet état, c'est un document irrécusable. Mais montrez-le aux amis du *saisi* ; ils n'y reconnaissent personne.

×

× ×

J'avais bien d'autres sophismes à la discrétion de mes dégoûts, car la répugnance à de longs labeurs est ingénieuse. Toutefois, j'aurais affronté ces ennuis s'ils m'avaient paru

me conduire à la fin que j'entrevois. Je voulais la loi intime de ce grand Léonard.

De ce front chargé de couronnes, je rêvais seulement à l'amande.

×  
× ×

Que faire, après parmi tant de réfutations, n'étant riche que de désirs, tout ivre que l'on soit de cupidité et d'orgueil intellectuels?

Se monter la tête? — Se donner enfin quelque fièvre littéraire, en cultiver le délire? - Brûler pour un beau sujet, que c'est peu devant le papier!

Une grande soif, sans doute, s'illustre elle-même de ruisselantes visions ; elle agit sur je ne sais quelles substances secrètes comme fait \*

[\*これに続くはずの紙葉(右肩に 6, 7, 8 のノンブルが打たれているはずの三枚の紙葉)が欠落している。f° 132 bis の、司書による注意書き « Les feuillets numérotés par Valéry 6, 7, et 8 manquent. » も、このことを指摘している。内容的には、冒頭部草稿群において紹介した三つの紙葉、すなわち、f° 116、f° 118、f° 118 bis をここに置くと、欠落はかなり補うことができる。とりわけ、f° 118 にはノンブル 4 と 6 が打たれており、このうちノンブル 6 のほうがこの欠落箇所のひとつを構成するのではないかと推定することは可能である。参考までに、冒頭部草稿群で紹介した f° 118 を再度、ここに示しておく。 ]

## f° 118

6 4

Ecrire, n'est-ce pas, le plus solidement et le plus exactement qu'on le puisse, construire cette machine de langage où la détente de l'esprit excité doit vaincre des résistances *réelles*? Etre écrivain, n'est-ce pas s'opposer utilement à soi-même ; savoir y introduire les contrariétés qui, interposées entre une émotion ou volonté initiale, et ces aboutissements que sont l'oubli, le désordre et le vague, ( issues fatales de la pensée, ) leur disputent un peu d'action renouvelable et d'existence indépendante ?

- On dit d'un bel écuyer qu'il ne faut qu'un avec sa monture ; on peut dire le même d'un virtuose avec son violon. Mais c'est le contraire qu'il faudrait dire de l'écrivain, et ce contraire le distingue de l'orateur.

×  
× ×

Je ne trouvais pas en moi ces conditions, ces obstacles comparables à des forces extérieures, qui permettent qu'on avance contre son premier mouvement. Je n'y trouvais que vellétés, possibilités, facilité dégoûtante ; toute une richesse involontaire,

vaine comme celle des rêves. C'est l'infini des choses usées...

Si je commençais de jeter les dés sur une page blanche, je n'amenais que les mots témoins de l'impuissance de la pensée : *génie, charme, admirable, prodige...* ~~Tous ces~~ attributs qui conviennent à tout, renseignent peu sur leur sujet, beaucoup sur la personne qui parle. Ils excitaient ma colère.

Pour comble de tourment, je ne savais pas me leurrer ; et si promptement je répondais par mes sentences impitoyables à mes images absolues que la somme de mes réflexions, à chaque instant, était nulle. J'adorais confusément mais passionnément la précision.

### № 133

9

spirituels perdus dans les statistiques de la vie locale du cerveau. Leur vrai prix ne vient pas de l'obscurité de leur origine, ni de la profondeur supposée d'où nous aimerions naïvement qu'elles sortent, et ni de la surprise précieuse qu'elles nous causent à nous-mêmes ; mais bien d'une rencontre avec nos besoins, et enfin de l'usage réfléchi que nous saurons en faire, — c'est-à-dire — de la collaboration de tout homme.

Mais s'il est entendu que nos plus grandes lumières sont intimement mêlées à nos plus grandes chances d'erreur, et que la moyenne de nos pensées est en quelque sorte insignifiante, — c'est celui en nous qui choisit, et c'est celui qui met en œuvre qu'il faut exercer sans repos. Le reste, qui ne dépend de personne, est inutile à invoquer comme la pluie. On le baptise, on le déifie, on le tourmente vainement ; il n'en doit résulter qu'un accroissement de la simulation et de la fraude, choses si naturellement unies à l'ambition de la pensée que l'on peut douter si elles en sont ou le principe ou le produit. Le mal de prendre une hypallage pour une découverte, - une métaphore pour une démonstration, - une phraséologie hagarde pour un torrent de connaissances capitales, - fait ~~bientôt~~ aisément des ravages excessifs ; et le mal de se prendre soi-même pour oracle!

×

× ×

~~Léonard est excellent contre ces abus. Rien de plus simple + sincère et de plus transparente que cette vie. Il se fait simplement d'année en sui toujours plus admirable écuyer de sa propre nature, il se sent, conduit sa main aux dessins les plus précis, se fait avec ses facultés une correspondance plus exacte et plus subtile que quiconque entre~~

Léonard de Vinci n'a pas de rapport avec ces abus. Parmi tant d'idoles que nous avons à choisir, puisqu'il en faut adorer au moins une, il a fixé devant son regard cette Rigueur Obstinée, qui se déclare elle-même la plus exigeante de toutes ; mais ce doit être la moins grossière d'entre elles, celle-ci que toutes les autres s'accordent pour haïr. La rigueur une fois instituée, la ~~plus grande~~ véritable liberté est ~~donnée~~ possible : c'est là le secret pourquoi les mathématiques vont si loin, si étroitement. Toute l'opération de ce grand esprit est uniquement déduite de son grand objet ; comme si une personne particulière n'y était pas attachée, sa pensée paraît plus universelle, plus suivie, plus indépendante qu'il n'appartient à une pensée individuelle.

Celui-ci donc, n'a pas peur des raisonnements ; il les laisse aller aux conséquences éloignées ; ~~et~~ il retourne au réel sans effort. Aucune superstition de l'intellect : il ne craint pas plus d'imiter que d'innover, car il sait en lui quelque chose d'éternellement actuel. Il ne rejette pas l'ancien, à cause de son antiquité ; ni le nouveau, parce qu'il est nouveau. Il ne connaît pas l'opposition si barbare et si mal définie que devait ~~inventer~~ dénoncer après lui, entre l'esprit de finesse et celui de géométrie, un homme entièrement insensible aux arts, qui ne pouvait s'imaginer cette jonction délicate, mais naturelle, de dons distincts ; qui pensait que la peinture est vanité, que la vraie éloquence se moque de l'éloquence ; qui, changeant sa neuve lampe contre une vieille, se perd à coudre des papiers dans ses poches, quand c'était l'heure de donner à la France la gloire du calcul de l'infini. Léonard est beaucoup plus simple. Il n'a pas de révélations , pas d'abîme ouvert à sa droite. Un abîme

**f° 135** [ノンブルなし。明らかに f° 134 に連続している。]

le ferait songer à un pont. Un abîme est excellent pour les essais de quelque grand oiseau mécanique.

Lui-même se devait considérer comme un modèle de bel animal pensant, qui sous la moindre intention du cavalier, sans défenses et sans secousses, passe d'une allure à toute autre. Esprit de finesse, esprit de géométrie, on les prend, on les quitte, comme fait le cheval ses rythmes successifs. Il suffit, peut-être, à l'être bien ordonné, de se prescrire *certaines modifications intenses et volontaires*, pour passer et repasser de l'ordre des transformations formelles et des actes symboliques, ~~à l'ordre~~ au régime des connaissances incomplètes et des impures spontanités. Posséder cette souplesse dans les changements profonds, user d'un tel registre d'accommodations incompatibles, c'est

seulement jouir de l'intégrité de l'homme, telle que nous l'imaginons chez les anciens. Cette ~~facilité~~ agilité nous déconcerte. Cette absence d'embarras, de prophétisme et de pathétisme ; ces idéaux précis ; ce tempérament toujours rétabli par un maître de l'équilibre, entre ses curiosités et ses moyens ; ce dédain de l'illusionnisme et des artifices chez le plus ingénieux des hommes, ce sont des scandales pour nous.

Quoi de plus étrange à nos yeux que cette élégance supérieure, quoi de plus dur à des êtres qui ont fait de la sensibilité une sorte de profession ; qui prétendent tout immoler à quelques phénomènes de contraste et de résonance et qui pensent tout saisir quand il se donne l'illusion de se confondre à la matière mobile et chatoyante de la (illi.) et de l'instant?

♣ 136 [ノンブルなし。前後の紙葉のヴァリエント。]

Léonard est excellent contre ces abus. ~~Rien de plus simple sincère et de plus transparente que cette vie~~ : il se fait simplement ~~d'année en année~~, toujours plus admirable écuyer de sa propre nature ; il dresse ses yeux, conduit sa main aux dessins les plus précis, resserre la correspondance de ses volontés avec ses pouvoirs, pousse son raisonnement dans les arts, et garde sa grâce.

Parmi tant d'idoles que nous avons à choisir, puisqu'il en faut adorer au moins une, il fixe devant son regard cette Rigueur Obstinée, qui se dit elle-même la plus exigeante de toutes ; mais ce doit être la moins grossière d'entre elles, celle-ci que toutes les autres s'accordent pour haïr.

[以上の部分の右上から左下にかけて斜線が引かれている。]

×

× ×

On n'a pas assez (illi.) – tempérament

~~toutes les opérations du plus grand homme peuvent en quelque sorte se passer in vitro~~

Donc, ni ambition, ni (illi.)

ni l'illusion du vrai, ni les richesses du faux

La rigueur

Moi, le vide

La critique par le vide

Rien que de (illi.) en lui

~~Rien à craindre de lui~~

~~orgueil le plus pur~~

L'intellect d'un h. paraît monté (illi.) pouvoir contradiction apparente et elle possède

La probabilité se multiplie

spontanéité (illi.)

№ 137 [これもノンブルなし。前後の紙葉のヴァリエント。パスカルの悪口を言っている有名な部分が、この紙葉で付加されているのがわかる。]

Léonard + de Vinci n'avait pas besoin de se mentir est excellent contre ces abus. ~~Pas d'être plus sincère, ni de plus transparent.~~ Aucune superstition de l'intellect : éternellement actuel il ne craint pas plus d'imiter que d'innover ; il ne jette pas l'ancien pour être ancien ni le moderne ~~ne le repoussent.~~ Il n'a pas peur du raisonnement ; ~~son bon sens~~ le il laisse aller à l'extrémité de l'analyse, d'où il retrouve au réel, sans rupture et comme sans effort. Il ne connaît pas l'opposition, si ~~grossière~~ grosse et si mal définie, ~~qui fut faite que l'on découvrait~~ après lui entre l'esprit de finesse et celui de géométrie \* ; ~~car~~ j'imagine qu'il lui suffit, ~~sans doute,~~ de certaines *modifications internes et volontaires* pour passer de l'ordre des transformations formelles à l'ordre des connaissances impures et imparfaites du monde concret. Le bel animal pensant passe d'une allure à une autre bien différente, sous la moindre ~~action~~ intention du cavalier, sans défenses et sans secousses. Posséder cette souplesse de modifications, ~~e'est simplement n'être pas atteint par le~~ ce registre d'accommodations, c'est simplement posséder l'intégrité de l'homme, telle que ~~nous l'imaginons~~ notre imagination la place chez les anciens.

[\* 頁下余白右側に次のようなメモが記され、この箇所に挿入するよう線で結ばれている。]

est instituée un homme entièrement ignorant des insensible aux arts et qui ne pouvait imaginer cette jonction délicate de tous en vérité, naturels, car il suffit qui trouve que la peinture est vanité, que le vrai éloquence se moque de l'éloquence et qui se perd à coudre des papiers dans sa poche au lieu + quand c'était l'heure de donner à la France la gloire du calcul de l'infini.

qui change un (illi.) et qui (illi.)

~~où il faut la nécessité parler~~

où forcés de jouer à qui au plus absurde, il faut ~~parir~~ exposer le néant contre l'inintelligible, et qui (illi.)

### ¶ 138

10

Léonard de Vinci n'a pas de rapport avec ces désordres. Parmi tant d'idoles que nous avons à choisir, puisqu'il en faut adorer au moins une, il a fixé devant son regard cette Rigueur Obstinée, qui se déclare elle-même la plus exigeante de toutes ; mais ce doit être la moins grossière d'entre elles, celle-ci que toutes les autres s'accordent pour haïr.

La rigueur une fois instituée, une véritable liberté est possible, tandis que la liberté apparente était de pouvoir obéir à chaque impulsion de hasard. C'est là le secret pour quoi les mathématiques vont si loin, si étroitement.

Toute l'opération de ce grand esprit ~~est~~ uniquement déduite de son grand objet ; et comme si une personne particulière n'y était pas attachée ; sa pensée paraît plus universelle, plus minutieuse, plus suivie et plus claire qu'il n'appartient à une pensée individuelle.

Elle ne craint pas les analyses ; il les mène, — ou ce sont elles qui le conduisent, — aux conséquences éloignées ; il retourne au réel sans effort. Aucune superstition de l'intellect. Il imite, il innove ; il ne rejette pas l'ancien, à cause de son antiquité ; ni le nouveau parce qu'il est nouveau, mais il consulte en lui quelque chose d'éternellement actuel.

Il ne connaît pas ~~surtout~~ le moins du monde l'opposition si ~~grossière~~ grosse et si mal définie, que devait, trois demi-siècles après lui, dénoncer entre l'esprit de finesse et celui de géométrie, un homme entièrement insensible aux arts, qui ne pouvait s'imaginer cette jonction délicate, mais naturelle, de dons distincts ; qui pensait que la peinture est vanité ; que la vraie éloquence se moque de l'éloquence ; et qui, ayant changé sa neuve lampe contre une vieille, se perd à coudre des papiers dans ses poches,

### ¶ 139

11

quand c'était l'heure de donner à la France la gloire du calcul de l'infini... Léonard n'a pas de révélations, pas d'abîme ouvert à sa droite. Un abîme le ferait songer à un pont. Un abîme pourrait servir aux essais de quelque grand oiseau mécanique...

Lui-même se devait considérer comme un modèle de bel animal pensant ; absolument

souple et délié ; doué de plusieurs modes de mouvement, qui sous la moindre intention du cavalier, sans défenses et sans retards, passe d'une allure à toute autre. Esprit de finesse, esprit de géométrie, on les épouse, on les abandonne, comme fait le cheval accompli ses rythmes successifs... Il doit suffire à l'être suprêmement coordonné de se prescrire certaines modifications intérieures, pour passer de l'ordre des transformations purement formelles et des actes symboliques, au régime de la connaissance imparfaite et des réalités spontanées. Posséder cette souplesse dans les changements profonds, user d'un tel registre d'accommodations incompatibles, c'est seulement jouir de l'intégrité de l'homme, telle que nous l'imaginons chez les anciens.

L'élégance supérieure nous déconcerte. Cette absence d'embarras, de prophétisme et de pathétisme ; ces idéaux précis ; ce tempérament entre les curiosités et les puissances, toujours rétabli par un maître de l'équilibre ; ce dédain de l'illusionnisme et des artifices, chez le plus ingénieux des hommes ; cette ignorance du théâtre, ce sont des scandales pour nous. Quoi de plus dur à concevoir pour des êtres comme nous sommes, qui font de la sensibilité une sorte de profession,

fr 140

12

qui prétendent tout posséder dans quelques effets de contraste, de résonance et d'analogie, et tout saisir quand ils se donnent l'illusion de se confondre à la matière chatoyante et mobile de leur durée?

Mais sans mystères, sans fraudes, sans tragédies verbales, sans délires ~~ni pâmions~~, Léonard, de recherche en recherche, se fait très simplement toujours plus admirable écuyer de sa propre nature ; il dresse indéfiniment ses idées, exerce ses regards, ~~développe~~ ses actes ; il conduit l'une et l'autre main aux dessins les plus précis, se dénoue et se rassemble, resserre la correspondance de ses volontés avec ses pouvoirs, pousse son raisonnement dans les arts, et préserve sa grâce.

×

× ×

Une intelligence si détachée en arrive ~~quelquefois parfois~~ à d'étranges attitudes, comme une danseuse nous étonne, de prendre et de conserver quelque temps des figures de pure instabilité. Son indépendance choque nos instincts et presque nos vœux. Rien de plus libre, c'est-à-dire, rien de moins humain, que ses jugements sur l'amour, ~~et~~ sur la mort. On les devine par ~~deux~~ des fragments qui sont dans ses cahiers : « ~~La fureur de l'amour~~ L'amour dans sa fureur, dit-il, à peu près, est chose si laide que la race humaine



s'éteindrait ( la natura si perderebbe ) si ceux qui le font se voyaient. » Ce mépris est accusé par divers croquis, unions anatomiques, coupes effroyables à même l'amour + l'extase. La machine érotique l'intéresse, ~~la chose qui répugne~~ et car la mécanique animale est son domaine le préféré ; mais un combat de sueurs, un monstre de musculatures antagonistes, une transfiguration en bêtes, cela semble n'exciter en lui que répugnance et que dédain.

**f° 141** [ノンブルなし。13のノンブルを持つf° 142およびf°143のヴァリエント。なお、この紙葉の左上から右下にかけて、斜線が一本引かれている。]

Sa pensée de la mort, ~~est tout à fait caractéristique~~ il faut le dégager d'un texte assez court, ( mais d'une plénitude et d'une simplicité sigulières, ) qui devait peut-être figurer dans le préambule d'un traité jamais achevé sur le corps humain.

L'originalité de cette vue est dans la considération de la mort à partir de l'organisation merveilleuse et de l'architecture ~~du corps~~ corporelle. La vie organisée ~~lui~~ ~~semble si~~ est tellement belle, que l'âme, quoique *chose divine*, ne se sépare qu'avec les plus grandes peines de ce corps qu'elle habitait, - et *je crois bien*, dit-il, *que ses larmes et sa douleur ne sont pas sans raison*.

Cette parole est chargée de sens. La mort, événement presque désastreux *pour l'âme*, et diminution de cette *chose divine* !

×  
× ×

Au regard de l'intelligence pure, la passion et la mort sont des accidents étrangers. Si un livre est jeté dans le feu, les flammes dont il se consume, l'annihilent, quelles que soient les figures qui y sont tracées ; une courte lutte chimique abolit indifféremment toutes écritures, et la chose qui signifiait quelque chose se change en chose pure, sans que la violence dévorante ait pu

**f° 142**

13

Son jugement sur la mort, il faut le tirer d'un texte assez court, — mais d'une plénitude et d'une simplicité antiques, - qui peut-être devait prendre place dans le préambule d'un traité jamais achevé du Corps Humain.

L'organisation de notre corps est une telle merveille, songe-t-il, que l'âme, quoique

*chose divine*, ne se sépare qu'avec les plus grandes peines de ce corps qu'elle habitait ; et *je crois bien*, dit Léonard, *que ses larmes et sa douleur ne sont pas sans raison*.

Il n'est pas utile d'approfondir l'espèce de doute chargé de sens qui est dans ces mots. La mort, considérée comme une catastrophe *pour l'âme* ; la mort, diminution de cette *chose divine* ! Et la mort atteint l'âme dans son œuvre la plus chère par la destruction, d'une telle architecture ~~qui était est l'œuvre de cette âme~~, qu'elle s'était faite pour y habiter !..

Je n'ai pas qualité pour déduire de cette brève et réticente parole une métaphysique selon Léonard ; mais il semble assez intéressant d'indiquer au passage que sa philosophie qui est d'ordinaire très *naturaliste*, très opposée au *spiritualisme*, très attachée à l'explication physico-mécanique de toutes choses, se trouve sur le point de l'âme, dans une situation toute comparable à celle de la philosophie scolastique. L'Eglise, — pour autant que l'Eglise est thomiste, — ne donne pas à l'âme séparée une existence bien enviable. Elle n'a guère que l'être. Elle est inconcevable pour nous, inconcevable pour elle-même. Elle a tout perdu avec le corps, excepté l'honneur de son autonomie ; mais cet homme ne lui est rien. Je ne sais même pas si elle peut au moins se souvenir d'avoir été la *forme* de son corps. L'importance du corps est si grande, selon l'Eglise, que le

#### ¶ 143

13

Son jugement sur la mort, il faut le tirer d'un texte assez court mais texte d'une plénitude et d'une simplicité antiques, - qui, peut-être, devait prendre place dans le préambule d'un traité, jamais achevé, du Corps Humain.

L'organisation de notre corps est une telle merveille, songe cet homme qui a disséqué dix cadavres pour suivre le trajet de quelques veines, - que l'âme, quoique *chose divine*, ne se sépare qu'avec les plus grandes peines de ce corps qu'elle habitait. - *Et je crois bien*, dit Léonard, *que ses larmes et sa douleur ne sont pas sans raison...*

Il n'est pas utile d'approfondir l'espèce de doute chargé de sens qui est dans ces mots. Il suffit de considérer l'ombre énorme que projette l'idée non révélée : la mort, interprétée comme une catastrophe pour l'âme ; la mort, diminution de cette *chose divine* ! La mort, atteint l'âme indirectement, dans son œuvre la plus chère, par la destruction d'une telle architecture qu'elle s'était faite pour y habiter !

~~Je ne sais pas déduire~~ Que je ne déduise pas de cette brève et réticente parole une métaphysique selon Léonard ; mais je me laisse aller à un rapprochement assez facile,

puisqu'il se fait de soi-même dans ma pensée. La philosophie du Vinci est très *naturaliste*, très opposée au *spiritualisme*, très attachée à l'explication physico-mécanique de toutes choses, et quand, sur le point de l'âme, la voici toute comparable à la philosophie de l'Eglise. L'Eglise, — pour autant, du moins, que l'Eglise est thomiste, — ne donne pas à l'âme qui a perdu son corps. Elle n'a guère que l'être même : c'est un minimum minimorum. Elle est inconcevable pour nous, inconcevable pour elle-même. Elle a tout dépouillé, pouvoir, vouloir, et peut-être le savoir ; il ne lui reste que l'homme de son autonomie ; mais cet homme ne lui est rien. Je ne sais même pas s'il lui peut souvenir d'avoir été quelque part et dans le temps la *forme* de son corps ? Une si vaine et

f° 144

14

si triste condition n'est heureusement que passagère : la raison demande, et le dogme impose, la résurrection de la Chair. Sans doute, cette chair aura-t-elle des propriétés bien différentes de celles que notre chair aura possédées. Il faut concevoir ici toute autre chose qu'un simple renversement du principe de Carnot, et qu'une improbabilité finalement réalisée... Mais enfin l'âme destituée doit ~~aux termes du~~ dogme, retourner dans un corps une vie fonctionnelle, et par ce corps une sorte de matière qui remplisse ses vides catégoriques intellectuelles.

Le Un dogme, qui ~~fait~~ dispense au corps de l'homme ~~cette place~~ à peine secondaire, qui réduit remarquablement l'âme, qui est si exactement contraire au spiritualisme pur, ~~et qui~~ distingue de la ~~sorte la plus~~ manière la plus sensible, l'Eglise d'avec les la plupart des autres confessions chrétiennes. \* Mais il me semble toutefois que depuis deux ou trois siècles il n'est pas de dogme sur lequel la littérature et même l'enseignement religieux aient passé plus légèrement. Je ~~ne sais pas pourquoi~~ n'en sais pas la cause et suis, du reste, infiniment peu sûr, disant ceci, de ne pas me tromper.

[\*頁下部の余白に記された以下のテキストをこの箇所に挿入するという意味に解される線が、この箇所と以下のテキストを結んでいる。]

Il y a d'ailleurs dans cette Eglise tout un aspect physique dans les dogmes et les rites de l'Eglise qui n'occupe sans doute que les théologiens de profession et dont elle semble avoir la pudeur. On retrouve dans les sacrements, dans les intentions.

si triste condition n'est heureusement que passagère : la raison demande, et le dogme impose, la ~~résurrection de la~~ restitution d'une Chair. Sans doute, cette chair suprême aura-t-elle ~~des propriétés~~ les qualités bien différentes de celles que notre chair aura possédées. ~~Il faut concevoir, je pense,~~ Il doit s'agir de toute autre chose qu'un simple renversement du principe de Carnot, et qu'une réalisation de l'*improbable*. Mais enfin l'âme ~~destituée~~ dépouillée doit selon la théologie ~~catholique~~ retourner dans un certain corps, une certaine vie fonctionnelle ; et par ce corps souvent, une sorte de matière qui remplisse ses vides catégories intellectuelles + de merveilles incorruptibles.

Un dogme qui concède à l'organisation corporelle cette importance à peine secondaire, qui réduit remarquablement l'âme, qui interdit le ridicule de se la figurer, qui ~~va jusqu'à l'obliger de~~ subordonne à se réincarner pour qu'elle puisse participer à la pleine vie éternelle, ~~ce dogme~~ doctrine si exactement contraire au spiritualisme pur, ~~distingue de la manière la plus sensible profonde~~ sépare le plus, l'Eglise de la plupart des autres confessions chrétiennes. - Mais il me semble que depuis deux ou trois siècles, il n'est pas de dogme sur lequel la littérature religieuse + sacrée ait passé plus légèrement. Apologistes, prédicateurs n'en parlent guère. Je n'en sais pas la cause, et du reste, je suis infiniment peu sûr, disant ceci, de ne pas me tromper.

×

× ×

Pour une ~~intelligence~~ puissance d'esprit aussi sensible à elle-même, et comme fermée sur elle-même par le détour de l'univers, la mort et les passions sont des accidents étrangers, qui peuvent affecter son existence, qui peuvent interrompre mais sont incapables de changer son opération. Elle leur appartient, comme les figures tracées sur un livre appartiennent à la flamme, à l'humidité, aux animalcules qui le dévorent. Si ~~un~~ le livre est jeté dans le feu, les ardeurs dont il se consume, l'annihilent, quelles que soient les images et les paroles qu'il portait. Une courte

[15 のノンブルのついた紙葉は見当たらない。刊行テキストに基づけば、f° 146 は、内容的には、前の f° 145 (ノンブル 14) に続く部分であることから、これが 15 に相当すると考えることもできるが、一方で、f° 145 末尾の Une courte に続く文言がないという点では、果たして、この f° 146 が 15 に当たるかどうか疑問である。むしろ、f° 145 末尾の Une courte に続くという点では、ノンブルのついていない f° 130 が lutte chimique から始まっており、連続している可能性が高い点を考慮し、さしあたって、ここに入れて、紹介しておくことにする。]

fr 130

lutte chimique abolit indifféremment toutes écritures ; et la chose qui signifiait quelque chose se change en chose pure ; mais la *violence des flammes* et la chose signifiée ne peuvent pas se rencontrer.

Que si cette impossibilité est profondément ressentie, et cette indépendance est habituellement perçue, - ce qui revient à dire : si l'intelligence est exceptionnellement nette, comme dans Léonard, la conscience se distingue ~~perpétuellement~~ indéfiniment de ses objets, ~~et, parmi ses objets, de l'homme~~ + elle croit à son existence séparable comme + Je pense invinciblement à une ~~masse~~ en rotation sur un axe distinguerait et qui sentirait les efforts distinguerait une accélération qui l'éloigne et une autre qui la ramène, et qui en quelque sorte la conserve. La masse demeure indivisée mais son état n'est concevable que composé.

Cette conscience perpétuellement distinguée de ses objets, ~~se distingue en particulier de l'être~~ et parmi ses objets de l'homme même qui la supporte ; ou, plus exactement, car nul n'est homme pour soi-même, elle trouve et remarque parmi ses objets, un objet ~~constant~~ plus constant que tous les autres et qui ~~peut~~ intervient à l'occasion de ~~n'importe lequel des autres~~ quel autre que ce soit, toujours appellable, et toujours peu éloigné.

La soif de vaincre, la soif de connaître, la soif de pouvoir ~~sont~~ paraissent essentiellement liées à cet *objet*, qui est comme la reine toujours assoiffée de la conscience dans un milieu totalement inconnu. Cet objet est la personne + personnalité, ~~qui~~ sorte de divinité psychologique secondaire qui prend la forme de notre corps et de notre visage, qui reprend à notre nom et qui peine ou jouit non seulement suivant ce corps, qui demande à être (illi.), toute chose qui est (illi.) à la conscience qui est impassible qui est le lien exclusif du plaisir et de la douleur dans l'univers, qui mesure la crainte, qui a une histoire – le Moi n'a pas d'histoire, et les l'éternel pronom

fr 146 [ノンブルなし。続く fr147 と fr148 (いずれもノンブル 16 が打たれている) のヴァリエント。]

Je me suis égaré si loin dans Léonard ~~et (illi.) avant~~, que je ne puis pas tout d'un coup revenir à moi-même. Bah ! Tout chemin m'y conduira : mais c'est la définition de ce moi-même.

~~Suivons donc un peu plus avant la tentation de notre curiosité, et sur une pente~~

~~toujours plus trompeuse.~~

~~Il ne peut pas absolument se perdre, il ne perd que son temps.~~

Suivons donc un peu plus avant la tentation de notre curiosité, ~~et sur une pente toujours plus trompeuse qu'elle développe flottons mais qu'elle (illi.) qui nous attire~~ qui nous attire sur (illi.) toujours plus trompeur jusqu'à un point si parfaitement (illi.) aura beau si l'y (illi.) tout en flammes ; il n'y a que lui de (illi.) et sur la pente toujours plus sensible qu'elle développe tout l'esprit pourrait y passer

[この他メモあり (略)]

## f° 147

16

la moitié de sa nourriture est sacrifiée +destinée aux idées

Je me suis égaré si loin dans Léonard, que je ne puis pas tout d'un coup revenir à moi-même... Bah! Tout chemin m'y reconduira : c'est la définition de ce moi-même. Il ne peut pas absolument se perdre, il ne perd que du temps.

Suivons donc, un peu plus avant la pente et la tentation de l'esprit ; suivons-les malheureusement sans craintes, cela ne mène à aucun fond véritable. Même notre pensée la plus profonde est ~~enfermée~~ contenue dans les conditions invincibles qui font que toute pensée est superficielle. Ce n'est qu'une forêt de transpositions, un palais fermé de miroirs que féconde une seule lampe et qui engendrent à l'infini.

Mais encore essayons à la suite de notre curiosité de nous ~~figurer~~ éclairer le système d'un homme de première grandeur ; il est assujetti aux réalités et aux nécessités communes ; il voit comme nous, et il voit comme soi ; il a un jugement de sa nature, et un sentiment de sa fonction ; il est absent et présent ; il ressent cette dualité que doit soutenir un prêtre ; il sent bien qu'il ne peut pas se ~~déterminer~~ définir entièrement à lui-même par les données et par les mobiles ordinaires ; vivre, et même bien vivre, ce n'est qu'un moyen pour lui ; agir, ce n'est encore qu'un exercice ; briller à d'autres yeux, c'est en recevoir un éclat de fausses pierreries...

Il lui faut donc se découvrir je ne sais quels repères tellement à l'égard desquels ~~son~~ ~~désir~~ sa vie particulière et sa vie *généralisée*, son image ~~propre~~ variable et son ~~propre~~ opiniâtre principe obstiné se composent. Il lui faut réfléchir, mais sa clairvoyance imperturbable qui lui semble le représenter à lui-même tout entier, voudrait échapper à la relativité qu'elle ne peut pas ne pas conclure de tout le reste.

Ce qu'il trouve en lui-même de plus important, quoi que toujours suggéré, aussi et animé par l'ordinaire de la vie, se constitue à l'écart d'elle de toute vie et cet écart d'une certaine amplitude, forme un empire de distraction qui le sépare

¶ 148

16

Je me suis égaré si loin dans Léonard, que je ne ~~peux~~ sais pas tout d'un coup revenir à moi-même... Bah! Tout chemin m'y reconduira : c'est la définition de ce moi-même. Il ne peut pas absolument se perdre, il ne perd que du temps.

Suivons donc, un peu plus avant, la pente et la tentation de l'esprit, suivons les malheureusement sans craintes, cela ne mène à aucun fond véritable. Même notre pensée la plus profonde est contenue dans les conditions invincibles qui font que toute pensée est superficielle. On ne pénètre que dans une forêt de transpositions, ou dans un palais fermé de miroirs, que féconde une lampe solitaire et qui l'engendrent à l'infini.

Mais encore essayons de notre curiosité pour nous éclairer le système caché de quelque individu de première grandeur ; et imaginons à peu près comme il doit s'apparaître, quand il s'arrête quelquefois dans le mouvement de ses travaux, et ~~de ses desseins~~ qu'il se regarde dans l'ensemble.

Il se considère d'abord assujetti comme nous aux réalités et aux nécessités communes ; et il se replace ensuite dans le secret de la connaissance séparée. Il voit comme nous, et il voit comme soi. Il a un jugement de sa nature et un sentiment de sa fonction. Il est absent et présent. Il soutient cette espèce de dualité que doit soutenir un prêtre. Il sent bien qu'il ne peut pas se définir à lui-même par les données et par les mobiles ordinaires : vivre, et même bien vivre, ce n'est qu'un moyen pour lui ; agir, ce n'est encore qu'un exercice ; la gloire ? Briller à d'autres yeux, c'est en recevoir un éclat de fausses pierreries...

Il lui faut donc se découvrir je ne sais quels points de repère au regard desquels sa vie particulière et sa *vie généralisée*, son image variable et son principe opiniâtre se composent. Sa clairvoyance

¶ 149 [ノンブルはないが、明らかに ¶ 148 の末尾に連続している。]

imperturbable qui lui semble, mais sans la ~~tromper~~ convaincre, le représenter à lui-même tout entier, voudrait se soustraire à la relativité qu'elle ne peut pas ne pas

conclure de tout le reste. Elle a beau se transformer en elle-même, et se reproduire aussi pure que le soleil, cette même identité apparente emporte avec elle un sentiment d'être trompeuse : elle se sait soumise à un mystérieux entraînement et à une modification sans témoin ; elle sait donc qu'elle implique toujours, même au point le plus net de sa lucidité, une possibilité cachée de faillite et de ruine totale, comme il arrive au rêve le plus précis de contenir un germe inexplicable de non-réalité.

*Durus est hic sermo*, dit le lecteur. Mais en ces matières, qui n'est pas vague est difficile ; qui n'est pas difficile est nul. Allons encore un peu.

×  
× ×

Pour une présence d'esprit aussi sensible à elle-même que celle que nous avons supposées et qui se ferme sur elle-même par le détour de « l'univers », la mort et les passions sont des accidents étrangers qui peuvent interrompre, mais qui sont incapables de changer son opération. Pareil à l'anneau de fumée, le système de substitutions psychologiques est infrangible, et pourtant il périt. Mais il périt sans la moindre altération de sa propriété fondamentale, car une loi ne périt point faute de s'exercer. L'intelligence appartient à la destruction comme les figures tracées sur un livre appartiennent à la flamme, à l'humidité, aux animalcules qui le dévorent. Si le livre tombe dans le feu, les ardeurs dont il se consume l'annihilent, quelles que soient les paroles qu'il portait. Une courte lutte chimique, et la chose qui signifiait quelque chose se change en pure chose, mais la violence des flammes et la chose signifiée ne peuvent pas se rencontrer.

[以下は鉛筆書きの加筆]

plus il est conscient, plus il se contient et se re(illi.), plus il se prive de toute possibilité de (illi.) Chance

¶ 150

17

Il lui faut donc se découvrir je ne sais quels points de repère tellement placés que sa vie particulière et sa *vie généralisée*, son image variable et son principe opiniâtre se composent. La clairvoyance imperturbable qui lui semble, (mais sans la convaincre,) le représenter tout entier à lui-même, voudrait se soustraire à la relativité qu'elle ne peut pas ne pas conclure de tout le reste. Elle a beau se transformer en elle-même, et de jour en jour se reproduire aussi pure que le soleil, cette même identité apparente emporte avec elle un sentiment qu'elle est trompeuse. Elle sait, dans sa fixité, ~~qu'elle est~~ être



soumise à un mystérieux entraînement et à une modification sans témoin. Et elle sait donc qu'elle enveloppe toujours, même au ~~point~~ degré le plus net de sa lucidité, une possibilité cachée de faillite et de totale ruine, - comme il arrive au rêve le plus précis de contenir un germe inexplicable de non-réalité.

C'est une sorte de lumineux supplice que de sentir que l'on voit tout, sans cesser de sentir que l'on est encore *visible* et sans se trouver jamais le poste ni le regard qui ne laissent rien derrière eux.

*Durus est hic sermo*, dit le lecteur. Mais en ces matières, qui n'est pas vague est difficile ; qui n'est pas difficile est nul. Allons encore un peu.

×  
×   ×

Pour une présence d'esprit aussi sensible à elle-même, et qui se ferme sur elle-même par le détour de « l'univers », ~~les surprises, les passions et la mort~~ la vie et la mort sont des accidents ~~sans aucune signification~~ qui peuvent bien l'interrompre toute entière, mais qui sont incapables de changer son opération : s'ils ~~la~~ suppriment la conscience, ils seront par là même privés de toute signification ; s'ils la conservent, ils rentrent dans le système.

[<sup>¶</sup> 130 と同様にノンプルの打たれていない <sup>¶</sup> 131 と <sup>¶</sup> 132 は内容的に連続していると考えられ、ノンプルつき草稿群の中でその本来の位置を正確に特定するのは難しいが、前後の紙葉の内容から判断して、さしあたり、<sup>¶</sup> 150 と <sup>¶</sup> 151 の間に入れて、ここに紹介しておく。]

## **<sup>¶</sup> 131**

Mais

Pareil à l'anneau de fumée, ce système complet de substitutions psychologiques, plus il est conscient et se représente par lui-même, plus il se détache de ~~notre être~~ toute origine, et il semble qu'il se dépouille, ~~en quelque sorte~~, en même temps, de toute chance de rupture. Il tend merveilleusement à une indépendance et à une insécabilité parfaites. Sa mémoire et les phénomènes, ~~son nouveau et ses souvenirs~~, les émotions et les actes s'y trouvent tellement reliés, attendus, répondus ; ~~son~~ le passé si bien employé, ~~son~~ le nouveau si tôt compensé, ~~son~~ l'état si bien reconquis que rien semble ne commencer rien se terminer au sein de cette activité presque pure. ~~Et elle sait bien qu'elle périra~~ Et elle périra, sans doute et cette prévision y figure ; mais elle n'y attache aucune autre idée. Elle périra sans la moindre altération de sa propriété fondamentale, de sorte que la

mort fait partie de la vie mentale et n'a de sens que dans elle.

L'intelligence appartient à la destruction, comme les figures sur un livre appartiennent à la flamme, à l'humidité, aux animalcules qui le dévorent. Si le livre tombe dans le feu, les ardeurs dont il se consume, quelles que soient les paroles qu'il portait, le vrai, le faux, grec ou latin, l'annihilent. Une courte lutte chimique, et la chose qui disait quelque chose se change en simple chose ~~pure~~ ; mais la violence des flammes et la chose signifiée ne peuvent pas se rencontrer.

Ce dualisme est fondamental. Certes, la conscience est instruite de son oblitération finale ; mais au titre d'une notion. Elle ~~couvert~~ recouvre par ses expériences cette pente ~~et cette direction~~ funeste qui mène à l'état chaotique +vers la mort, irrésistible, instantané et indivis ; qui s'obscurcit de troubles et d'angoisses, se dirige à tâtons au milieu de bourdonnements et de vertiges vers le désordre, la confusion des temps, et des fonctions, dans le mélange des variétés et des dimensions de la connaissance, et qui l'éloigne de son point de netteté, de solidité, de son maximum de lumière, de choix, de distinction. Puisqu'aucune idée n'épuise la conscience, il faut bien qu'elle périsse dans un événement incompréhensible, ~~qui prépare~~ et inexprimable que prédisent et préparent ces ~~affreuses~~ affres et ces sensations, sensations paradoxales ne servant pas, comme font les autres, de commencements à la connaissance mais avertissant des approches de l'être pur et simple, ou néant.

## ¶ 132

Elle pense donc cette issue, mais comme limite infranchissable vers laquelle ont beau s'accoutumer les apports de l'imagination et les termes des séries logiques, ils ne combrent pas la mesure ; ~~ils ne sauraient~~ il n'est pas d'idée qui épuise la conscience et la tâche de la conscience, et qui soit pour elle une résolution née d'elle-même, un accord final. Si elle possédait cette idée, comme ce serait une idée d'entre les idées, et pourtant donc être amenée par le jeu même des pensées et des impressions, ce jeu serait sans issue, il y aurait une idée d'où l'on ne reviendrait pas, - une certaine pensée nous tuerait directement par un arrêt de la pensée sans que le mécanisme en soit altéré. Il n'y a pas une certaine disposition dans mécanique central comparable à la position singulière du pêne d'un serrure.

C'est pourquoi nous sommes bien contraints de ~~concevoir~~ penser notre pensée comme acte indéfini et inépuisable, soustraite ~~à tout objet~~ à l'action directe de tout objet de sa conception ; et de substituer à la connaissance de ~~notre~~ son extinction, une multiplicité

d'images sont vaines, dont l'effet peut être, sans doute, d'amener des réactions très intenses dans l'ordre émotif mais elles sont insp(illi.)antes dans l'ordre intellectuel, et elles sont témoignages de la vie.

[この下の余白にメモあり。その中に次のようなメモがある。]

Faisons voir

Encore une image de la conscience

Je la compare volontiers à cette division qui s'opère dans un liquide impur quand il est soumis à une rotation assez rapide.

## № 151

18

Pour une présence d'esprit aussi sensible à elle-même, et qui se ferme sur elle-même par le détour de « l'univers », tous les événements de tous les ~~ordres~~ genres, et la vie, et la mort, et les pensées, ne lui sont que des figures particulières de même que ~~toute~~ chaque *chose visible* est à la fois ~~essentielle~~ étrangère, indispensable, et inférieure à la ~~chose qui y voit~~ vision même, ainsi l'importance de ces figures, si grande qu'elle apparaisse à chaque instant, ~~apparaît nécessairement toujours subordonnée à cet éminent phénomène de~~ pâlit à la réflexion devant la persistance de cette loi de généralité et d'universalité que la conscience se sent être. Si des événements qu'elle peut toujours considérer aussi bien *intérieurs*, ont le pouvoir de la supprimer, ils sont ~~par là même~~ du même coup destitués de toute signification ; que s'ils la conservent, ils rentrent dans son système. L'intelligence appartient à la vie, et donc à la destruction, à charge de réciprocité. Elle est instruite, ~~certes~~ oui, de ses fluctuations et de son effacement final mais au titre d'une notion ; et elle se croirait aisément inamissible et inaltérable, si ce ~~n'est~~ n'était qu'elle a reconnu par ses expériences, un jour ou l'autre, diverses possibilités funestes, et l'existence d'une certaine pente qui mène plus bas que tout. Cette pente fait pressentir qu'elle peut devenir irrésistible ; elle prononce le commencement d'un éloignement sans retour du soleil spirituel, du maximum admirable de la netteté, de la solidité, du pouvoir de distinguer et de choisir ; on la devine qui s'abaisse, obscurcie de troubles, obsédée de bourdons et de vertiges, à travers la confusion des temps et le désordre des fonctions, et qui se dirige défaillante au milieu d'un mélange inexprimable des *dimensions* de la connaissance, jusqu'à l'état instantané et indivis qui étouffe ce chaos dans la nullité.

×  
× × ※

[この※という印は、次の紙葉 f° 152 に記された※に続くテキストがこの箇所に挿入されるという指示であると考えられる。]

## f° 152

18

L'intelligence appartient ~~donc~~ à la vie, et donc à la destruction, comme les figures tracées sur un livre appartiennent à la flamme, à l'humidité, aux animalcules qui le dévorent. Si le livre tombe dans le feu, les ardeurs dont il se consume l'annihilent, quelles que soient les paroles qu'il porte, le grec ou le latin, le vrai, le faux, l'utile ou l'inutile... les ardeurs dont il se consume les annihilent. Une courte lutte chimique, et la chose qui disait quelque chose signifié ne peuvent pas se rencontrer.

Ce dualisme est essentiel. La conscience, certes, est instruite de son effacement final, mais au titre d'une notion ; et elle se ~~croirait~~ ~~croit aisément~~ inamissible et inaltérable, si ~~elle n'avait~~ ce n'est qu'elle a reconnu par ses expériences certaines possibilités funestes, et certaine pente qui mène ~~au (ili.)~~ plus bas que tout, pente qui fait pressentir qu'elle peut devenir irrésistible ; qui prononce un éloignement sans retour du soleil spirituel, du maximum admirable de la netteté, de la solidité, du pouvoir de choisir et de distinguer ; qui s'obscurcit de troubles et d'angoisses, et qui se dirige à travers les bourdonnements et les vertiges, au milieu de la confusion des temps et du désordre des fonctions, dans un mélange inexprimable des *dimensions* de la connaissance, vers l'état indivis et instantané qui étouffe ce chaos dans la nullité et représente un nouvel équilibre mais non plus mobile.

※ [この※以降のテキストは前の紙葉 f° 151 の末尾に記された※の部分に挿入されるという指示であると考えられる。]

Mais opposé tout de même à la mort qu'il l'est à la vie, un système complet de substitutions psychologiques, plus il est conscient et se remplace par lui-même, plus il se détache de toute origine, et plus il se dépouille, en quelque sorte, de toute chance de rupture. Pareil à l'anneau de fumée, il tend merveilleusement à une indépendance et à une insécabilité parfaites ; l'échange perpétuel de *choses* qui le constate, lui semble l'assurer d'une conservation indéfinie, car il n'est attaché à aucune, et il ne

**fr 153**

18

que s'ils la conservent, ils rentrent dans son système. L'intelligence appartient à la vie, et donc à la destruction, à charge de réciprocité. Elle est instruite, certes, de ses fluctuations et de son effacement final, mais au titre d'une notion ; et elle se croirait aisément inamissible et inaltérable si ce n'est qu'elle a reconnu par ses expériences, un jour ou l'autre, ~~certaines~~ diverses possibilités funestes, et l'existence d'une certaine pente qui mène plus bas que tout. Cette pente fait pressentir qu'elle peut devenir irrésistible ; elle prononce le commencement d'un éloignement sans retour du soleil spirituel, du maximum admirable de la netteté, de la solidité, du pouvoir de distinguer et de choisir ; elle s'obscurcit de troubles et de doutes ; elle se dirige, obsédée de bourdons et de vertiges, au milieu de la confusion des temps et du désordre des fonctions, et dans un mélange inexprimable des *dimensions* de la connaissance, vers l'état instantané et indivis qui étouffe ce chaos dans la nullité.

Mais, opposé tout de même à la mort qu'il l'est à la vie, un système complet de substitutions psychologiques, plus il est conscient et se remplace par lui-même, plus il se détache de toute origine, et plus se dépouille-t-il, en quelque sorte, de toute chance de rupture. Dans une très claire conscience, la mémoire et les phénomènes se trouvent tellement reliés, attendus, répondus ; le passé si bien employé ; le nouveau si promptement compensé ; l'état de relation totale si nettement reconquis que rien ne semble pouvoir commencer, rien se terminer au sein de cette activité presque pure. Pareil

**fr 154**

19

à l'anneau de fumée, le système fait d'énergies prétend merveilleusement à une indépendance et à une insécabilité parfaites. L'échange perpétuel de *choses* qui le constitue, l'assure en apparence d'une conservation indéfinie, car il n'est attaché à aucune, et il ne contient pas quelque *élément-limite*, quelque objet singulier de perception ou de pensée tellement important, plus réel, plus immédiat que tous les autres, que quelque autre ne puisse pas venir après lui. Il n'est pas une telle idée qui satisfasse aux conditions inconnues de la conscience au point de la faire évanouir ; ou qui soit pour elle une résolution née de son développement, comme un accord final de sa dissonance permanente. Il n'existe pas de pensée qui extermine le pouvoir de penser, et le conclue, — une certaine position du pène qui ferme la serrure.

×  
× ×

Puisque la connaissance ne se connaît pas d'extrémité, et puisque aucune idée n'épuise la tâche de la conscience, il faut bien qu'elle périsse dans un événement incompréhensible que lui prédisent et que lui prédisent et lui préparent ces affres et ces sensations extraordinaires dont je parlais, ~~tout à l'heure~~, qui lui nous esquissent des mondes instables et incompatibles avec la vie ; mondes inhumains, mondes infirmes et comparables à ces mondes que le géomètre ébauche en niant +modifiant certains axiomes, le physicien en supposant d'autres constantes que celles admises... Les rêves, les malaises, les sinistres empires, tous ces états à demi impossibles, qui introduisent en quelque sorte des valeurs fractionnaires ou des solutions transcendantes dans l'équation de la connaissance, placent, entre la netteté de la vie et la simplicité de la mort, d'étranges degrés, des variétés et des phases ineffables, — car il n'est pas de noms pour les choses parmi lesquelles on est bien seul.

#### fr 155

20

Comme la grande musique combine les libertés du sommeil avec la suite et l'enchaînement de l'extrême attention et fait la synthèse d'êtres intimes momentanés, ainsi les fluctuations de l'équilibre psychique donnent à percevoir des modes aberrants de l'existence. Ce sont des pays de passage, des espaces où la continuité, la connexion, la mobilité connues sont transformées ; des domaines non-archimédiens qui défient le mouvement, des régions bizarrement soudées à elle-même, des sites associés à notre nausée, à notre moindre changement... On ne peut pas dire qu'ils sont réels, on ne peut pas dire qu'ils ne le sont pas. Qui ne les a pas traversés, ne connaît pas le prix de la lumière naturelle et du monde le plus banal ; ~~et~~ il ne connaît pas davantage la véritable fragilité de ce monde, le nombre incalculable de conditions et de coïncidences que la spacieuse ingénuité de la nature implique. Mais au retour de ces royaumes où la logique la plus raffinée, la mystique la plus ~~suivie~~ cultivée, l'usage des poisons du système nerveux, et d'ailleurs tous les incidents de nos frontières conduisent diversement la conscience, elle soupçonne toute la stable réalité qui nous entoure de n'être qu'une solution entre bien d'autres de problèmes universels. Il lui semble que les *choses* pourraient être assez différentes de ce qu'elles sont sans qu'elle-même fût très différente de ce qu'elle est. Il lui semble qu'elle est capable d'un monde de dieux mondes, et elle se sépare par là, illusoirement, de ce corps qui la maintient. Elle revient de sa généralité

pour considérer son corps et son monde comme des restrictions presque conventionnelles, presque volontaires, à l'étendue de son pouvoir. Elle contient plus de combinaisons de ses éléments sensoriels que l'observation ne lui en fait rendre. Elle se croit plus vaste qu'il en faut, plus rigoureuse que toute difficulté pratique sur la demande, plus profonde que l'abîme de la vie et de la mort animales ; elle conçoit

## fr 156

21

rement soudées à elle-même, domaines non-archimédiens qui défient le mouvement ; sites perpétuels dans un éclair ; surfaces qui se creusent, conjuguées à notre nausée, à notre moindre intention. On ne peut pas dire qu'ils sont réels ; on ne peut pas dire qu'ils ne le sont pas. Qui ne les a pas traversés ne connaît pas le prix de la lumière naturelle et du milieu le plus banal ; il ne connaît pas davantage la véritable fragilité du monde, ni le nombre prodigieux de coïncidences et de conditions que la spécieuse ingénuité de la nature donnée implique...

Cependant, au sortir de ces intervalles étonnants où la logique la plus raffinée, la mystique bien cultivée, la présence de poison dans le système nerveux, - conduisent diversement la conscience, celle-ci vient à soupçonner toute la réalité accoutumée de n'être qu'une solution, entre bien d'autres, de problèmes universels. Il lui semble que les *choses* pourraient être *assez* différentes de ce qu'elles sont, sans qu'elle-même fût *très* différente de ce qu'elle est. Elle ose considérer son corps et son monde comme des restrictions presque conventionnelles, - presque arbitraires, imposées à l'étendue de sa fonction. Elle croit qu'elle correspond, ou qu'elle répond, non à un *monde*, mais à quelque système de degré plus élevé dont les éléments soient des mondes. Elle est capable de plus de combinaisons internes qu'il n'en faut pour vivre; de plus de rigueur que toute occasion pratique n'en requiert et n'en supporte ; elle se juge plus profonde que l'abîme même de la vie et de la mort animales.

Retirant de ces remarques et de ces ~~illusions insurmontables~~ prétentions, une hardiesse périlleuse ; forte de cette espèce d'indépendance

## fr 157

22

et d'invariance qu'elle est contrainte de s'accorder, elle se conçoit enfin comme fille directe et ressemblante de l'être sans visage, sans origine, sans bornes, auquel incombe

ou se rapporte toute la tentative du cosmos... Encore un peu, et elle ne compterait plus comme existences nécessaires que deux entités essentiellement inconnues : *Soi* et *X*. Toutes deux abstraites de tout, impliquées dans tout, impliquant tout. Egales et consubstantielles.

×  
× ×

L'homme que l'exigence de l'infatigable esprit conduit sur cette hauteur, ~~et dans cette nuit~~ où sa présence trop éveillée éprouve la profondeur des ténèbres brutes, se perçoit comme nu et dépouillé, et réduit à la suprême pauvreté de sa puissance ; victime, chef-d'œuvre, accomplissement de la simplification et de l'ordre dialectique, comparable à cet état où parvient la pensée la plus riche et la plus vivante quand elle s'est assimilée à elle-même, et reconnue et consommée en un petit groupe de caractères et de symboles.

Le voici sans instincts, presque sans images; et il n'a plus de but. Il n'a pas de semblables.

Tout son génie est hors de ce moment, au dessus de lui. Ce ne fut qu'un moyen pour y atteindre. Il n'y a pas d'acte de génie qui ne soit *moindre* que l'acte d'être.

Il ne s'agit plus de choisir, de créer, et pas plus de se conserver que de s'agrandir. Rien n'est à surmonter, et il ne peut même être question de se détruire.

Il n'est plus qu'une assistance invisible dans l'obscur d'un théâtre dont la nuit obscure haletante, quoique bondée d'organes et d'organismes, semble vide ; tout ce qui est, est caché, possible (illi.) brûle et s'agite dans un cadre fermé. Rien ne peut naître, périr, avoir un temps, une figure, un lieu, que sur cette scène si restreinte, que mes destins et mes volontés ont définie, ont fait restreindre, qui ont opposée ; et ont tellement défini que

[次の ♯ 158 と ♯ 159 はノンブルなし。共に、23 のノンブルが打たれた ♯ 160 および ♯161 のヴァリアントと見られる。意識を劇場の観客に喩えた有名な箇所である。]

### ♯ 158

analogie, et faute de mots.

Tout "génie" est ~~hors de ce moment, au dessus de lui~~ consumé. Ce ne fut qu'un moyen pour atteindre à cette dernière simplification. Il n'y a pas d'acte de génie qui ne soit *moindre* que l'acte d'être. Une loi magnifique habite et fonde l'imbécile : ce qui est facile en celui-ci n'est que

Il ne s'agit plus de choisir, ni de créer, et pas plus de se conserver que de s'agrandir. Rien n'est à surmonter, et il ne peut même être question de se détruire.



Ce n'est plus qu'une assistance invisible dans la nuit ~~haletante~~ l'obscur d'un théâtre dont la nuit nombreuse et haletante, bondée d'organismes et quoique bourée d'organes qui battent, qui soufflent, qui s'échauffent, qui se gènent et se contiennent, semble vide. ~~Tout ce qui est~~ Cependant que sensible, intelligible, possible, brûle et s'agite dans un cadre fermé. Rien ne peut naître, périr, avoir ~~un temps, une figure, un lieu,~~ être quelque chose que sur cette scène ~~bien restreinte~~ que les destins et la volonté ont ~~définie~~ circonscrite, ont séparée de je ne sais quel primitif chaos, ont opposée et subordonnée à la condition d'*être vue*...

×  
× ×

Tout ceci que je viens grossièrement d'exprimer est enveloppé dans l'idée même la moins précise que nous nous faisons de l'intellect. ~~Je ne fais que d'y insister~~ Je n'ai que (illi.). La caractère de l'homme étant la conscience, et celui de la conscience une perpétuelle exhaustion, un détachement sans arrêt de ce qui paraît, quoi qui paraisse, acte inépuisable, indépendant ~~de la quantité~~ des nombres comme de la qualité des choses apparues, j'ai supposé que de recul en recul, l'homme intellectuel se réduisait enfin à cette opération

Le leur de la personnalité les conduit au moi pur

## ¶ 159

analogie, et faute de mots.

Tout "génie" est maintenant consumé, ne peut plus servir de rien. Ce ne fut qu'un moyen pour atteindre à cette dernière simplicité. Il n'y a pas d'acte de génie qui ne soit *moindre* que l'acte d'être. Une loi magnifique habite et fonde l'imbécile ; l'esprit le plus fort ne trouve pas mieux en soi-même.

Il ne s'agit plus de choisir, ni de créer ; et pas plus de se conserver que de s'agrandir. Rien n'est à surmonter, et il ne peut même être question de se détruire.

Cette conscience contrainte de se définir par ~~l'infinité~~ l'ensemble complet des choses qui ne sont pas *Elle*, ~~d'être~~ et par l'excès de la connaissance sur le tout, et qui pour s'affirmer doit commencer par épuiser un infini, elle est donc, aussi peu ~~que l'on~~ qu'elle voudra, différente du néant...

~~Et pourtant~~ Elle fait songer invinciblement à une assistance invisible dans l'obscur ~~d'un~~ du théâtre ; qui ne peut pas se contempler et qui sent qu'elle compose toute cette nuit haletante et compacte +avide, construite d'organismes qui se compriment ; nuit ~~nocturne complète~~ compacte, nuit impénétrable, nuit absolue, mais nuit nombreuse

toute faite et bourée d'organes qui se limitent, qui s'échauffent, qui battent, qui soufflent, qui s'échauffent.

Cependant que dans un cadre fermé brûle et s'agite tout le sensible, l'intelligible, le possible, les 3 aspects de la durée,

## fr 160

23

analogie, et par manque de mots.

Il ne s'agit plus de choisir, ni de créer ; et pas plus de se conserver que de s'agrandir. Rien n'est à surmonter, et il ne peut même être question de se détruire.

Tout "génie" est maintenant consumé, ne peut plus servir de rien. Ce ne fut qu'un moyen pour atteindre à ~~cette~~ la dernière simplicité. Il n'y a pas d'acte de génie qui ne soit *moindre* que l'acte d'être. Une loi magnifique habite et fonde l'imbécile ; l'esprit le plus fort ne trouve pas mieux en soi-même.

Cette conscience accomplie, contrainte de se définir par le total des choses, et par l'excès de la connaissance sur ce Tout, et qui pour s'affirmer, doit commencer par épuiser un infini, dont il lui faut nier tous les éléments, - elle est donc différente du néant d'aussi peu que l'on voudra...

Elle fait songer invinciblement à une assistance invisible dans l'obscurité d'un théâtre ; présence qui ne peut pas se contempler, et qui sent qu'elle compose toute cette nuit haletante et ~~compacte~~ orientée ; nuit complète, nuit impénétrable, nuit absolue ; mais nuit avide, nuit nombreuse, nuit ~~toute-construite~~ édiflée d'organismes qui se limitent et se compriment, toute faite et ~~bourée~~ compacte d'organes qui battent, qui soufflent, qui s'échauffent, qui défendent leur emplacement et leur fonction... ~~Mais~~ Et là, dans un cadre fermé, brûlent et s'agitent tout le Sensible, l'Intelligible, le Possible. Rien ne peut naître, ~~et~~ périr, être à quelque degré, avoir un temps, un lieu, une figure, un signe, - que ~~sur cette scène définie que~~ si ce n'est sur cette scène définie que les destins ont circonscrite, ont séparée

## fr 161

23

analogie, et par manque de mots.

Il ne s'agit plus de choisir, ni de créer ; et pas plus de se conserver que de ~~s'agrandir~~ s'accroître. Rien n'est à surmonter, et il ne peut même être question de se détruire....

Tout “génie” est maintenant consumé, ne peut plus servir de rien. Ce ne fut qu'un moyen pour atteindre à la dernière simplicité. Il n'y a pas d'acte de génie qui ne soit *moindre* que l'acte d'être. Une loi magnifique habite et fonde l'imbécile ; l'esprit le plus fort ne trouve pas mieux en soi-même.

×  
× ×

Enfin, cette conscience accomplie, s'étant contrainte à se définir par le total des choses et par l'excès de la connaissance sur ce Tout, elle qui pour s'affirmer, doit commencer par nier une infinité de fois, une infinité d'éléments ; par épuiser les objets de son pouvoir sans épuiser ce pouvoir même, - elle est donc différente du néant d'aussi peu que l'on voudra... ~~et différente de tout!~~

Elle fait songer naïvement à une assistance invisible dans l'obscurité d'un théâtre ; présence qui ne peut pas se contempler, condamnée en spectacle adverse, et qui sent qu'elle compose toute cette nuit haletante, invinciblement orientée ; nuit complète, nuit impénétrable, nuit absolue ; mais nuit nombreuse, nuit très avide, nuit toute ~~édifiée~~ construite d'organismes qui se limitent et se compriment ; nuit secrètement organisée, et bondée d'organes qui battent, qui soufflent, qui s'échauffent, qui défendent, chacun selon sa nature, leur emplacement et leur fonction... En regard de l'intense et mystérieuse assemblée, brillent, ~~brûlent et~~ dans un cadre fermé, s'agitent tout le sensible, l'intelligible et le possible. Rien ne peut naître, périr, être à quelque degré, avoir un temps, un lieu,

¶ 162 [ノンブルなし。¶ 163 のヴァリエント。]

de je ne sais quelle primitive confusion, comme furent au premier jour les ténèbres séparées de la lumière, et ils ont opposée et subordonnée à la condition d'*être vue*...

×  
× ×

C'est à présent qu'il faut juger ~~de ce grand état de l'intelligence~~ de l'homme le plus intellectuel, quand toutes les idoles renversées, et sa curiosité magnifiquement (illi.), il revient ou plutôt il redescend on le voit comparaître à sa propre justice.

Si je vous ai menés dans cette solitude +situation et jusqu'à cette netteté désespérée, nous y fûmes conduits par

qui du haut de cette extrémité où le conduit le gouvernant de ses moyens, l'analyse habituelle, l'usage ne peut échapper à rendre net le fonctionnement le plus général de la

conscience. Une sorte d'égalité de ses pensées devant ceux

Et lui-même sa personnalité, il se juge –

il centrifuge toutes choses

Il est impossible que l'activité de l'esprit ne le conduise pas à cette considération extrême et élémentaire. Il y a certaines relations dans lesquelles les choses les plus hétérogènes doivent entrer, se soumettre

quelle réaction va en sortir

pas d'idoles

pas de personnalité

c'est qu'il fallait rechercher

## fr 163

24

une figure, une signification, si ce n'est sur cette scène définie que les destins ont circonscrite, et que l'ayant séparée de je ne sais quelle confusion primordiale, comme furent au premier jour les ténèbres séparées de la lumière, ils ont opposée et subordonnée à la condition d'*être vue*...

×

× ×

Si je vous ai menés dans cette solitude, et jusqu'à cette netteté désespérée, c'est le caractère de l'homme est la conscience ; et celui de la conscience, une perpétuelle exhaustion, un détachement sans exception de tout ce qui paraît, quoi que paraisse ; acte inépuisable, indépendant de la quantité comme de la qualité des choses apparues... Traitant de l'homme intellectuel, j'ai supposé que son extrême désir le réduisait enfin à cette opération, qui consiste à refuser toujours à être quoi que ce soit.

et par lequel l'*homme de l'esprit* doit enfin se réduire sciemment à un refus indéfini d'être quoi que ce soit.

Il en résulte que tous les phénomènes se trouvent frappés d'une sorte d'égale répulsion, et comme rejetés successivement par un même geste, apparaissent dans une certaine équivalence. Les sentiments et les pensées ~~s'échappent~~ sont enveloppés dans cette condamnation universelle. Ceux qui n'ont pas saisi le principe si simple de cette exhaustion ne conçoivent pas que rien ne lui échappe. Il faut un certain degré d'attention pour mettre nos mouvements les plus intimes au rang des événements extérieurs et des objets ; mais du moment qu'ils sont observables, ils vont se joindre à

toutes choses observées.

Il est impossible que l'activité d'un esprit ne le conduise pas à cette considération extrême et élémentaire. Elle essaye de se saisir, de se justifier, de s'expliquer à elle-même : elle aboutit à une simplification

f° 164

24

une figure, une signification, si ce n'est sur cette scène définie que les destins ont circonscrite, et que l'ayant séparée de je ne sais quelle confusion primordiale, comme furent au premier jour les ténèbres séparées de la lumière, ils ont opposée et subordonnée à la condition d'*être vue*...

×  
× ×

Si je vous ai menés dans cette solitude, et jusqu'à cette netteté désespérée, c'est qu'il fallait bien conduire à sa dernière conséquence l'idée que je me suis faite d'une puissance intellectuelle. Le caractère de l'homme est la conscience ; et celui de la conscience, une perpétuelle exhaustion, un détachement sans repos et sans exception de tout ce qui paraît, quoi qui paraisse ; acte inépuisable, indépendant de la quantité comme de la qualité des choses apparues. ~~J'ai supposé, traitant de l'homme de l'esprit, que son analyse propre le réduisait à cette opération : se refuser indéfiniment à être quoi que ce soit.~~

Par là, tous les phénomènes se trouvant frappés d'une sorte d'égle répulsion, et comme rejetés successivement par un geste identique, apparaissent dans une certaine équivalence. Les sentiments et les pensées sont enveloppés dans ~~cette~~ une condamnation ~~universelle~~ uniforme qui s'étend à tout ce qui est perceptible. Ceux qui n'ont pas ~~saisi~~ atteint toute la simplicité de cette exhaustion ne conçoivent pas que rien ne lui échappe. Il faut quelque attention pour mettre nos mouvements les plus intimes au rang des événements extérieurs et des objets, mais du moment qu'ils sont observables, ils vont se joindre à toutes choses observées. Couleur et douleur, souvenir, attente et surprises ; cet arbre et le flottement de cet arbre, et sa variation annuelle, et son ombre comme sa substance, ses accidents de figure et de position, les saisons et toutes les circonstances qu'il rappelle à mon esprit, - *tout cela est égal*... Toutes choses se substituent, - ne serait-ce pas la définition des *choses* ?

×  
× ×

Il est impossible que l'activité d'un esprit ne le conduise pas à cette considération extrême et élémentaire. Chaque sensation, chaque perception, chaque perturbation et chaque retour, si différents qu'ils soient l'un de l'autre, si intenses qu'ils puissent être, ~~si variés, si simplifiés, si bien enchaînés qu'ils soient,~~ *conservernt* identiquement la possibilité de sentir, de percevoir. Rien ne remplit, rien ne contente et n'annule cette immuable attente. Rien ne peut convenir exactement à ce qui subsiste par opposition.

Notre *personnalité* elle-même, que nous prenons grossièrement pour notre plus intime et plus profonde propriété, est chose muable et accidentelle auprès de ce *moi* le plus pur. Elle n'est qu'une divinité psychologique secondaire, qui habite notre miroir ; qui obéit à notre nom ; qui est sujette à la douleur comme les faux dieux, et comme eux la proie des vers ; qui est gourmande et qui sollicite des louanges. Elle ne résiste pas à la force des vins, à l'altération de la démente, à l'anamorphose du rêve. Plus encore, elle est obligée, avec ennui, de se reconnaître des égales, de s'avouer l'inférieure de quelques autres. Tout, d'ailleurs, lui rappelle qu'elle n'est qu'un événement ; qu'elle figure dans les statistiques et dans les tables ; qu'elle a commencé par une chance séminale ; couru des milliards de risques ; été façonné par une quantité innombrable de circonstances désordonnées. Chaque *personne* est un « jeu de la nature » .

Il est impossible que l'activité d'un esprit ne le conduise pas à cette considération extrême et élémentaire. Ses mouvements multipliés, ses internes contestations, ses perturbations, ses retours analytiques, que laissent-ils d'inaltéré ? Qu'est-ce qui résiste à l'entrain des sens, à la dissipation des choses, à l'affaiblissement des souvenirs, à la variation lente de l'organisme, à l'action incessante et mutiforme de l'univers ? – Ce n'est que la conscience seule, à l'état le plus *abstrait*.

Notre *personnalité* elle-même, que nous prenons grossièrement pour notre plus intime et plus profonde *propriété*, n'est qu'une *chose*, et muable et accidentelle, auprès de ce *moi* le plus nu. Elle n'est enfin qu'une divinité psychologique secondaire, qui habite notre miroir, et qui obéit à notre nom. Elle est sujette à la douleur, friande de parfums comme les faux dieux, et comme eux, la proie +tentation des vers. Elle s'épanouit dans les louanges. Elle ne résiste pas à la force des vins, à la délicatesse des paroles, à l'emportement de la musique. Elle se perd dans le carnaval de la démente,

elle se laisse prendre aux anamorphoses du sommeil. Plus encore : elle est contrainte, avec ennui, de se reconnaître des égales, de s'avouer qu'elle est inférieure à telles autres ; et ce lui est amer et inexplicable. Tout, d'ailleurs, la fait souvenir qu'elle est une sorte d'événement ; qu'il faut qu'elle figure dans les statistiques et dans les tables ; qu'elle a commencé par une chance séminale, et dans un incident microscopique ; qu'elle a couru des milliards de risques ; été façonnée par une quantité innombrable de circonstances désordonnées... si bien que chaque *personne* est un « jeu de la nature », jeu de l'amour et du hasard.

¶ 167 [ノンブルはないが、明らかに ¶ 166 に連続している。]

Même la plus belle intention, même la plus savante pensée de cette créature n'ont rien que de casuel et de relatif. Elle y imprime sa ressemblance, et sa dépendance, et sa particularité, et quelques marques toujours d'une bassesse imaginable. Elle pense périssable, elle pense individuel, elle pense par occasion. Elle tire quelques ressources et quelque vanité de sa propre inconsistance, et de l'incertitude où elle nous laisse d'être positivement *quelqu'un* ; et donc elle se déguise aussi aisément qu'elle s'affirme. Son activité favorite est pour les fictions ; elle vit de romans, elle épouse sérieusement mille personnages. Un banquier est un être qui s'imagine d'être banquier, comme cet enfant de treize ans s'imagine d'être News. ~~C'est qu'il n'est pas de nature constante toujours~~ ~~rappelée (illi.)~~

~~Mais la soif de connaître, la soif de vaincre, la soif de pouvoir qui paraissent~~ ~~essentiellement liés à la personne, et dont elles sont des besoins et (illi.)~~

~~Mais cette personne cependant, cet objet singulier~~

~~Cette personne~~ Chaque vie vivante est enfin ~~comme~~ la racine toujours altérée de la conscience dans un milieu totalement inconnu où elle pousse, ~~comme des~~ pour radicales, une infinité de mensonges. Elle essaie multiples fois d'être une autre et s'avance aveuglément par créations comme la plante sous la terre. La soif de vaincre, la soif de pouvoir, la soif de connaître

Tout le détour, rien de l'arrêt

¶ 168

26

Même la plus belle intention, même la plus savante pensée de cette créature toujours

improvisée n'ont rien que de casuel et de relatif. Elle y imprime sa ressemblance, et sa dépendance, et sa particularité, et quelques marques toujours d'une bassesse inséparable. Elle pense périssable, elle pense individuel, elle pense par raccrocs, toute en occasions qu'elle se garde d'avouer. Elle tire quelques ressources et quelque vanité de sa propre inconsistance, et de l'incertitude où elle se trouve d'être positivement *quelqu'un* ; elle se déguise ~~de~~ et se nie aussi aisément qu'elle s'affirme. Son activité favorite est pour les fictions ; elle vit de romans, elle épouse sérieusement mille personnages. ~~Les neuf dixièmes de sa durée se passent dans ce qui n'est plus, dans ce qui n'est pas encore, dans ce qui ne peut pas être ;~~ et chacun peut ~~avancer~~ qu'elle observe en soi-même qu'elle traite et qu'elle distille tout un océan de folies qui la font plus heureuse et plus malheureuse qu'elle ne la peut supporter, pour extraire cette goutte de sagesse qui est son poison le plus violent. Enfin, les neuf dixièmes de sa durée se passent dans ce qui n'est plus, dans ce qui n'est pas encore, dans ce qui ne peut pas être, tellement que notre éternel *présent* a neuf chances sur dix de n'être jamais.

Mais cette vie individuée est la racine toujours altérée de la conscience dans un milieu totalement inconnu, où elle pénètre selon sa nature, poussant comme elle peut, comme ses nombreuses racelles, une multitude de mensonges +hypothèses. Elle essaie multiplement d'être toutes choses ; elle s'avance aveuglément par créations dans la substance même dont elle est faite. Tout la détourne, rien ne l'arrête, et c'est une plante sous la terre.

fr 169

26

inévitablement de leur origine. Son acte est toujours suspect de quelque bassesse, ses chefs-d'oeuvres sont casuels. Elle pense périssable, elle pense individuel, elle pense par raccrocs ; elle ramasse le meilleur de ses idées dans des occasions fortuites et secrètes qu'elle se garde d'avouer. Et d'ailleurs, elle n'est pas sûre d'être positivement *quelqu'un* ; elle se déguise et se nie plus facilement qu'elle ne s'affirme. Tirant de sa propre inconsistance quelques ressources et quelque vanité, elle met dans les fictions son activité favorite. Elle vit de romans, elle épouse sérieusement mille personnages. Enfin, les neuf dixièmes de sa durée se passent dans ce qui n'est plus, dans ce qui n'est pas encore, dans ce qui ne peut pas être, tellement que notre véritable *présent* a neuf chances sur dix de n'être jamais...

×  
× ×



~~Nous hésitons toute notre vie entre cette vie individuelle~~ Mais cette vie particulière laisse et la permanence fondamentale d'une conscience que rien ne supporte ; ~~ainsi~~ et comme que l'oreille retourne et reperd, à travers les vicissitudes d'une symphonie, un son grave et continu qui ne cesse jamais d'être entendu, mais qui cesse quelquefois d'être saisi, - le moi le plus pur, élément unique et monotone de l'être même dans le monde, ~~existe, est retrouvé, se fait sentir,~~ reperdu par lui-même ; et cette profonde *note* de l'existence ~~même~~ domine pour un instant toute la complication des conditions de l'existence.

~~Chacun de ces hommes, a pour condition, vous et moi, avons~~ Tous les individus ayant ceci de commun d'être uniques. Chacun réalise l'expérience bien réussi d'un appareil fermé, connaissant, universel, centré

Loi

¶ 170

27

le porte, en quelque manière, à la puissance de l'univers ? Ce n'est pas sa chère *personne* qu'il élève à ce haut point, puisqu'il la renonce par là-même ; et qu'il la substitue dans la première place par ce *moi* inqualifiable, qui n'a pas de nom, qui n'a pas d'histoire, qui n'est pas plus sensible, ni plus sujet à la destruction que le centre de gravité d'une bague, ou d'un système planétaire, mais qui, peut-être, résulte de tout, quel que soit ce tout.

Et que devient donc son orgueil, cet orgueil qui l'a conduit jusqu'ici ? Orgueil, conducteur manque duquel la cruauté et le coeur de se considérer si exactement lui eussent défailli, mais sentiment paradoxe

¶ 171 [ノンブルなし。27のノンブルがついた¶ 170 および ¶ 172 のヴァリエント。]

le porte, en quelque ~~sorte~~ manière, à la puissance de l'univers ? Ce n'est pas sa chère *personne* qu'il élève à ce haut point, puisqu'il la renonce en y pensant, et qu'il la substitue dans la place de *sujet* par ce moi inqualifiable, qui n'a point de nom, qui n'a point d'histoire ; qui n'est pas plus sensible, ~~ni plus soumis à la destruction,~~ ni moins réel que le centre de gravité d'une bague ou d'un système planétaire ; - mais qui résulte de tout, quel que soit ce tout...

~~Il n'offre pas~~ On ne donnera pas à ce dieu extrême, comme on fait aux autres, l'amour, des louanges, de la crainte, ni des sacrifices mesurées, - tout ce que peut offrir l'homme

de plus vil ; ( et quand il le fait, il se condamne secrètement, car il sent bien qu'il ne lâche pas ce qui lui importe le plus.)

Mais il immole en un moment ~~toute~~ son individualité. Son orgueil il l'a conduit jusque là, et là se consume. Jusque là, qu'après avoir réussi à se défaire de toute compassion avec d'autres hommes, et après qu'il s'est débarrassé du problème le plus étrange que nous puissions nous proposer et qui consiste simplement dans la coexistence de durées indépendantes, - *tot capita, tot tempora*, - problème comparable à celui de la relativité dans la physique, mais incomparablement plus difficile, - ~~ce qui reste enfin~~ il lui reste enfin seulement de quoi

il ne retrouve contre ce qui lui reste d'humain

## fr 172

27

le porte, en quelque manière, à la puissance de l'univers ? Ce n'est pas sa chère *personne* qu'il élève à ce haut degré, puisqu'il la renonce en y pensant, et qu'il la substitue dans la place du *sujet* par ce moi inqualifiable, qui n'a pas de nom, qui n'a pas d'histoire ; qui n'est pas plus sensible, ni moins réel que le centre de masse d'une bague ou d'un système planétaire, - mais qui résulte de tout, quel que soit ce tout...

Tout à l'heure, le but évident de cette merveilleuse vie intellectuelle était encore.. de s'étonner d'elle-même ; elle s'absorbait à se faire des enfants qu'elle admirât ; elle se bornait à ce qu'il y a de plus beau, de plus doux, de plus clair et de plus solide ; elle n'était gênée que de la comparaison de ses travaux avec les travaux des autres hommes ; elle s'embarrassait du problème le plus étrange que l'on puisse jamais se proposer, et qui consiste simplement dans la possibilité des autres ~~hommes~~ intelligences, dans la pluralité des singuliers, dans la coexistence contradictoire de durées indépendantes, - *tot capita, tot tempora*, - problème plus difficile que le problème de la *relativité* dans la physique... Et voici que son zèle pour être unique l'emportant, et que son ardeur pour être toute puissante l'éclairant, elle a dépassé toutes créations, toutes œuvres, et même ses projets les plus grands, en même temps qu'elle dépose ~~cette~~ toute tendresse pour elle-même. Elle connaît enfin qu'il ne peut pas exister ~~deux~~ plusieurs consciences. Elle immole en un moment son individualité. Elle est le moi, le pronom universel, appellation de Celui qui

n'a pas de rapport avec un visage. O quel point de transformation de l'orgueil ! Quelle modération la récompense de ses triomphes ! Son orgueil l'a conduite jusque là, et là se consume. Cet orgueil conducteur l'abandonne étonnée, toute nue, infiniment simple sur le pôle de ses trésors.

×  
×   ×

Ces pensées ne sont pas mystérieuses.

Le moi n'est-il pas identique dans tous les hommes ? Ne résiste-t-il pas à toutes les altérations de la personne ? N'est-il pas unique par essence, et sous peine de n'être pas ? Peut-on dire qu'il y en a deux, trois...? Mais y a-t-il une plus étrange pensée que celle de la multiplication de cette chose unique ? Quelle est cette nécessité qui est dans tous, et dont on ne peut pas dire qu'elle est répétée ?

L'orgueil du plus grand homme, quand il se précse, ne doit-il pas à la fin se reconnaître ~~pour~~ le sentiment plus insupportable d'une condition commune ? La puissance ne

J'aurais pu écrire que le groupe le plus général de nos transformations qui comprend toutes sensations, toutes pensées, admet un *invariant*.

¶ 174 [ノンブルなし。¶ 172 のヴァリエント。]

et comme il est arrivé où il ne savait pas qu'il allait ! Quelle modération la récompense de ses triomphes ! Il fallait bien qu'une si grande vie ait une magnifique conclusion, - non de sa durée, non une conclusion dans le temps, mais une conclusion toujours présente et toujours la même. Son orgueil l'a conduite jusque là, et là se consume. Cet orgueil conducteur l'abandonne étonnée, toute nue, infiniment simple sur le pôle de ses trésors.

×  
×   ×

J'aurais pu écrire tout abstraitement que le groupe le plus général de nos transformations, qui comprend toutes sensations, tous jugements, tout ce qui se manifeste *intus et extra*, admet un *invariant*.

×  
× ×

---Je me suis laissé aller au delà de toute patience et de toute clarté.

## 結末部草稿群

28の右肩ノンブルのついた紙葉 f° 173 とそれに連続した f° 174 を最後に、ノンブルつき紙葉群は終わり、29以下、結末部、すなわち、刊行テキスト末尾の §§25-27 に相当する部分の右肩ノンブルつき紙葉は見当たらない。ただし、右肩ノンブルではないが、f° 210 には 29 と 31 の数字が、f° 209 には 33 の数字が見える。おそらく、ヴァレリーはそれまでの番号の続きとして、これらの数字を考えていた可能性がある。刊行テキスト結末部に極めて近い形のテキストはないとしても、そこに活用されるテキスト部分を含む草稿群はいくつか存在するので、それらを結末部草稿群として、ここでまとめて紹介しておきたい。紹介の順番は、刊行テキストに出現するテーマ順とする。

№ 210

~~Placé dans la nécessité d'inventer un Léonard  
une peinture un peu arrangée de mon propre état~~

17 ~~Mon seul bien positif~~

~~Et quel autre que moi-même peut répondre quand nous appelons un esprit ? On n'en  
trouve que là — Jamais d'autre.~~

Et je me dis : pauvre âme c'est cela

Hereule

~~Voir fonctionner le héros~~

~~Je puis le parti — Supposer méthode~~

~~Travail central ayant repris en lui-même~~

~~Enfin je ne trouvais pas mieux~~

~~Cela était faux mais vivant~~

29 D'ailleurs – comme les choses pouvaient-elles

31 limite A

~~La pensée de X tend vers moi quel que soit X.~~

~~Quel que soit X la pensée de X tend vers moi, quel que je sois.~~

~~La connaissance de l'homme a pour limite la conscience de son être — et peut-être de son  
corps.~~

~~Je reprends le tableau de mon ingénuité~~

Je me suis laissé aller au delà de toute patience et toute clarté – Il faut en (illi.) et  
passer quelques instants en 1894. J'ai dit mon embarras, comme j'étais – de voir  
fonctionner le héros. Il fallait donc de l'(illi.), c'était (illi.) que je (illi.) à l'extrémité de me  
supposer. [このメモには全体に斜線が四つ引かれている]

№ 110

Placé dans la nécessité de figurer un tel personnage, mon propre état faisant mon seul bien positif, puisque j'étais si mal pourvu d'érudition, et que j'estimais celle-ci très utile à fournir des réponses mais incapable de donner une idée de l'homme en question dans sa marche même et dans son fonctionnement, -

Etant ~~mal~~ médiocrement pourvu d'érudition et d'ailleurs mal fait pour elle, je me défendais en pensant qu'elle peut bien fournir des réponses et des conditions mais ~~non pas~~ qu'elle ignore les questions

Tout me poussait à ce parti.

Placé dans la nécessité de figurer un tel être si étendu et si bien coordonné, ~~mon propre~~ et je ne tenais pas à en redire ~~du Vinci~~ qu'il fut peintre +moraliste et anatomiste et géomètre, ~~ingénieur~~ et créateur de spectacles... tout le monde ~~l'a dit~~ le sait. ( Et du reste cette sorte d'ubiquité n'est pas sans quelques exemples de son temps ) ~~Il l'a eu, à --- plus éminent.~~ Sa multiple couronne pose sur une tête. + elle va même plus loin que donne l'érudition sur un --- Toute l'érudition ~~du monde se pénètre ne va que nous suppr--- ne nous apprend~~

~~On~~+ et je n'étais pas l'érudit qui ~~ne peut~~ plus que le préciser par l'érudition cette connaissance commune. Mais comme une telle – en elle possible – Quelle est le même de tout (illi.) et de l'adaptation si diverse en apparence ?

La (illi.) le point que l'érudition ne donne pas. Elle n'appar(illi.) que (illi.)

J'aurais tant aimé de voir fonctionner le héros ! Non pas tant comme un contemporain l'a pu ~~voir~~ observer – c'est là le but final de l'érudition, la limite ~~dont elle peut supporter~~ (illi.) j'avais l'atteindre où doit tendre quelque espoir – mais à peu près – comme je me connais moi-même, - ~~avec un peu plus et un peu moins~~

Et sans doute je ne me flattais pas de pouvoir atteindre ~~cette (illi.)~~ dité ce but insensé +extravagant mais j'étais je m'assurais que le Vinci en tant que problème était là.

Ce problème je ne pensais pas le résoudre, mais le poser. [メモ 4 行分 illi.]

J'avais pour moi –

Mon seul bien positif - -

C'était aussi ma *bonne foi*, mon *devoir*.

Moi

Il serait presque un procédé critique 33

Trop suranné : l'auteur est cause de l'oeuvre. ( Il en est bien plutôt l'effet )

Mais cause est –

Le critique qui servirait à quelque chose consiste à reconstituer le travail – Il ne s'agit de anecdotes

imaginer contre un autre homme que l'auteur pourrait arriver au même résultat. Le problème est insoluble – car il manque bien à (illi.) les accidents inouïables que recouvre et (illi.) Mais les ceux d'un h. sont toujours un faux – On est donc conduit à construire un être imaginaire de *précision*. C'est difficile. Personne obligé de (illi.)

## fr 109

Enfin, je le confesse, je ne trouvais pas mieux que d'attribuer à Léonard mes propres agitations, prenant ~~+comme à~~ le désordre de mon esprit + pour l'ordre du sien tout éclairé par un idéal de l'ordre +la plénitude du sien , ~~m'eût donné la~~ (illi.) Cela était faux et vivant.

Supposant que mes difficultés étaient résolues, je n'avais pas d'ailleurs grand effort à faire sur certains points : comme de retrouver la naïveté de certains aspects de Léonard, naïveté créée par les quatre siècles qui m'en séparaient. Je ne voulais pas qu'il n'y ait pas entre les activités – si l'on remonte assez avant dans la conscience – de la frontière – Les domaines qui semblent séparés sont continus au moyen d'une dimension. L'oiseau passe sans difficulté d'un j(illi.) l'autre.

Ceci n'est pas fanta(illi.)- [左欄外余白に 29 と記されている]

on peut trouver dans les sciences – aussi la définition

La vision scientifique. Voir au lieu des corps, leur centres, leur plans et axes d'inertie

en lui-même – très différent de la contemplation et de l'attente d'illumination. mais Rien de plus rare que voir sur le terrain un esc(illi.) de la première force n'a pas besoin d'aller sur le terrain

Le point capital en le passage de l'observation à la formule

L'histoire de la mécanique est le plus riche document que nous ayons sur cette phase capitale. ( Car nous n'avons pas la véritable histoire de l'antique géométrie ) Cette difficulté qui s'est trouvée à définir l'ineptie

Rien de plus curieux que les tâtonnements autour des faits pour saisir la notion mesurable Galilée.



Le rôle de Léonard grandit – V. Duhem, que je n'ai (illi.) pas lus (illi.) on dit beaucoup bien.

Mon intention de tout traiter par le conscient et de reconstituer le raisonnement

Aviation – application

dégradation de la pensée

Je tiens que la v(illi.) intellectuelle était plus grande (illi.) qu'on songe aux travaux du XVIe (illi.) des nouvelles dépasse (illi.) des éclairer des mouvements, des agglomérations, des concurrences, des masses l'enn(illi.) prodigieux de la vanité

#### f° 209 v°

J'osai me considérer

décrire les manuscrits, les peintures du Vinci

Je ne voulais à aucun prix redire du Vinci qu'il fut peintre, architecte, géomètre et anatomiste, hydraulicien et ~~faiseur de~~ monteur de fêtes.

La multiple couronne pose sur une seule tête – Cette tête seule m'était intéressant –

L'érudition n'est qu'amusement

elle retrouve les ver(illi.) mais au sujet d'un (illi.)

Nos véritables pensées sont celles qui nous habitent longtemps et qui survivant aux occasions. Notre climat ne conviendrait pas à celles que le hasard fait germer et que le temps fait périr

Tout ce qui est vrai d'un homme ne sert pas toujours à le mieux connaître. Qui n'a pas dit, et qui n'a pas fait des choses qui ne sont pas de soi ? Si on les (illi.)

[この他にもメモあり。(illi.)]

#### f° 217

J'osai enfin me considérer

Enfin je ne trouvai pas mieux

Quelle présomption

Hercule

C'était une bonne foi de me supposer à lui. Cela était faux mais vivant.

D'ailleurs comment les choses pouvaient-elles et quels autres que nous même peut répondre

~~Et j'osai me considérer~~

Apologie

## fr 202

Mille chose le sollicitaient – Je (illi.) théorie (illi.) analyse  
a beau être fort

Un Hercule, même de l'esprit, n'a pas plus de muscles que nous : ils ne sont que plus  
~~forts~~ gros.

L'Hercule intellectuel

B

Prendre – tous travaux comme applications d'un travail central  
sous produits – Peinture etc..

Quel travail

manuscrits montrent

d'une gestation véritable – comme un groupe,

autre perfectionnés

la volonté de tout de réduire le monstre lui-même

il ne s'éprit plus de vaincre (illi.) son soi les monstres mais plutôt de les produire par  
leur principes – de les réduire à l'humble condition – de cas particuliers et de ~~solutions~~  
~~singulières~~ paradoxes explicables

Je pris le parti de lui supposer une méthode

ayant sa fin en lui-même – ce travail très difficile de contemplation de l'attente des  
illuminations. Je le supposai *en mettant tout en conscient.*

**f° 212 v°**

lionardo, che tanto penate.

~~Je me suis égaré si loin dans Léonard (illi.) beaucoup au delà que je ne sais puis tout  
d'un coup me revenir à moi-même.~~

la vie même dans ce qu'elle a de plus essentiel  
Quel est son fondement, replace, la quantité de  
destruction qu'elle comporte – *écart maximum*

[この他にもメモあり。(illi.)]

**f° 216**

Léonard – mythe. W

Quant au vrai Léonard, il fut ce qu'il fut

Ses idéaux sont pour partie, atteints.

Mais la personne reste, et au contraire, on s'en éloigne

il n'y a pas de progrès sur les personnes. Tout ce qui est personnel et demande l'individu ne connaît pas de (illi.) dans la personne même. Les siècles et les travaux sont impuissants à faire un athlète, un cavalier +dessinateur, un poète, et même un véritable philosophe soit plus – ne sont pas plus. Il n'y a pas ad(illi.)té.

De ce point de vue pas d'ancien ni de modernes. La puissance extérieure de l'h. peut être plus grande.

Mais ni sa possession de lui-même, ni sa précision réelle d'ailleurs le n. d'ho(illi.)  
je l'applais, je sentais

## 『註と余談』 1919年版テキスト

1938年の全集版に基づいたプレイヤード版テキストでは、いわゆるレオナルド三部作は、年代順に、『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』（1895年発表）、『註と余談』（1919年発表）、『レオナルドと哲学者たち』（1929年発表）というように並べられ、さらに、各テキストの欄外には、1929年から1930年にかけて書き込まれたヴァレリーによる自註が付属している。ちょうど、モンテーニュの『エッセー』が複数の加筆によって重層的なテキスト場となっているのと同様に、ヴァレリーのレオナルド三部作も、各本文テキストへの欄外註の付加によって、これもまた重層的なテキスト場となっている。プレイヤード版に慣れている私たちは、当然ながら、これらのテキストを、欄外註と一緒に読むことに慣れている。欄外註によって、過去のテキストに対する後年のコメント、書き足りなかった部分への補足など、ヴァレリー自身による生き生きとした「自己対話」を味わうことができるのは、この欄外註の大きな魅力である。しかし、1919年の『註と余談』について、フランス国立図書館所蔵の草稿を参照しながら、その生成過程を考えるという場合、当然のことながら、後年に付加された欄外註は、いったん考察の外に置かれなければならない。この際、さしあたって目的論的な「決定稿」の位置に置かれるべきテキストは、1919年刊行のテキストということになる。

ラ・ヌーヴェル・ルヴェ出版（ガリマール）から1919年10月に刊行された『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』第二版は百頁の薄い冊子である。まず『註と余談』（NOTE ET DIGRESSIONS）が、やや小さめの活字で収められ（pp.9-41）、青年期のテキストはその後に、やや大きめの活字で収められている（pp. 45-100）。『註と余談』は『序説』への長過ぎる前書き（あるいは *prétexte*）になっている。そのせいか、書物の題名は『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』第二版なのだが、『註と余談』のほうが、むしろ、この書物の看板テキストとなっているようにも見える。

1919年版の刊行テキストは、全部で二十七のセクションに分かれている。長短様々ある各セクションの間には、三つのアスタリスクを正三角形のかたちに打った記号が置かれており、この印によって、二十七のセクションが明確に区別されている。各セクションは、必ずしもひとつのアリネアではなく複数個のアリネアから成っている場合も多い。以下、1919年版テキストを提示するにあたって、便宜上、第一セクションを§1のように略記して、各セクション冒頭に記載しておくことにする。

## NOTE ET DIGRESSIONS

*Pourquoi l'auteur, dit-on, a-t-il fait aller son personnage en Hongrie?*

*Parce qu'il avait envie de faire entendre un morceau de musique instrumentale dont le thème est hongrois. Il l'avoue sincèrement. Il l'eût mené partout ailleurs, s'il eût trouvé la moindre raison musicale de le faire.*

H. BERLIOZ. Avant-propos de la *Damnation de Faust*.

[§1] Il me faut excuser d'un titre si ambitieux et si véritablement trompeur que celui-ci. Je n'avais pas le dessein d'en imposer quand je l'ai mis sur ce petit ouvrage. Mais il y a vingt-cinq ans que je l'y ai mis, et après ce long refroidissement, je le trouve un peu fort. Le titre avantageux serait donc adouci. Quant au texte... Mais le texte, on ne songerait même pas à l'écrire. *Impossible!* dirait maintenant la raison. Arrivé à l'ennui coup de la partie d'échecs que joue la connaissance avec l'être, on se flatte qu'on est instruit par l'adversaire; on en prend le visage; on devient dur pour le jeune homme qu'il faut bien souffrir d'avoir comme aïeul; on lui trouve des faiblesses inexplicables, qui furent ses audaces; on reconstitue sa naïveté. C'est là se faire plus sot qu'on ne l'a jamais été. Mais sot par nécessité, sot par raison d'État! Il n'est pas de tentation plus cuisante, ni plus intime, ni de plus féconde, peut-être, que celle du reniement de soi-même: chaque jour est jaloux des jours, et c'est son devoir que de l'être; la pensée se défend désespérément d'avoir été plus forte; la clarté du moment ne veut pas illuminer au passé de moments plus clairs qu'elle-même; et les premières paroles que le contact du soleil fait balbutier au cerveau qui se réveille, sonnent ainsi dans ce Memnon: *Nihil reputare actum...*

[§2] Relire, donc, relire après l'oubli, — *se* relire, sans ombre de tendresse, sans paternité; avec froideur et acuité critique, et dans une attente terriblement créatrice de ridicule et de mépris, l'air étranger, l'œil destructeur, — c'est refaire, ou pressentir que l'on referait, bien différemment, son travail.

L'objet en vaudrait la peine. Mais il n'a pas cessé d'être au-dessus de mes forces. Aussi bien je n'ai jamais rêvé de m'y attaquer: ce petit essai doit son existence à Madame Juliette Adam, qui, vers la fin de l'an 94, sur le gracieux avis de Monsieur Léon Daudet, voulut bien me demander de l'écrire pour sa *Nouvelle Revue*.

[§3] Quoique j'eusse vingt-trois ans, mon embarras fut immense. Je savais trop que je connaissais Léonard beaucoup moins que je ne l'admirais. Je voyais en lui le personnage principal de cette Comédie Intellectuelle qui n'a pas jusqu'ici rencontré son poète, et qui serait pour mon goût bien plus précieuse encore que la *Comédie Humaine*, et même que la *Divine Comédie*. Je sentais que ce maître de ses moyens, ce possesseur du dessin, des images, du calcul, avait trouvé l'attitude centrale à partir de laquelle les entreprises de la connaissance et les opérations de l'art sont également possibles; les échanges heureux entre l'analyse et les actes, singulièrement probables: pensée merveilleusement excitante.

Mais pensée trop immédiate, — pensée sans valeur, — pensée infiniment répandue, — et pensée bonne pour parler, non pour écrire.

[§4] Cet Apollon me ravissait au plus haut degré de moi-même. Quoi de plus séduisant qu'un dieu qui repousse le mystère, qui ne fonde pas sa puissance sur le trouble de notre sens; qui n'adresse pas ses prestiges au plus obscur, au plus tendre, au plus sinistre de nous-mêmes; qui nous force de convenir et non de ployer; et de qui le miracle est de s'éclaircir; la profondeur, une perspective bien déduite? Est-il meilleure marque d'un pouvoir authentique et légitime que de ne pas s'exercer sous un voile? — Jamais pour Dyonisos, ennemi plus délibéré, ni si pur, ni armé de tant de lumière, que ce héros moins occupé de plier et de rompre les monstres que d'en considérer les ressorts; dédaigneux de les percer de flèches, tant il les pénétrait de ses questions; leur supérieur, plus que leur vainqueur, il signifie n'être pas sur eux de triomphe plus achevé que de les comprendre, — presque au point de les reproduire; et une fois saisi leur principe, il peut bien les abandonner, dérisoirement réduits à

l'humble condition de cas très particuliers et de paradoxes explicables.

[§5] Si légèrement que je l'eusse étudié, ses dessins, ses manuscrits m'avaient comme ébloui. De ces milliers de notes et de croquis, je gardais l'impression extraordinaire d'un ensemble hallucinant d'étincelles arrachées par les coups les plus divers à quelque fantastique fabrication. Maximes, recettes, conseils à soi, essais d'un raisonnement qui se reprend; parfois une description achevée; parfois il se parle et se tutoie...

Mais je n'avais nulle envie de redire qu'il fut ceci et cela : et peintre, et géomètre, et...

Et, d'un mot, l'artiste du monde même. Nul ne l'ignore.

[§6] Je n'étais pas assez savant pour songer à développer le détail de ses recherches, — (essayer, par exemple, de déterminer le sens précis de cet *Impeto*, dont il fait si grand usage dans sa dynamique ; ou dissertar de ce *Sfumato*, qu'il a poursuivi dans sa peinture) ; ni je ne me trouvais assez érudit, (et moins encore, porté à l'être), pour penser à contribuer, de si peu que ce fût, au pur accroissement des faits déjà connus. Je ne me sentais pas pour l'érudition toute la ferveur qui lui est due. L'étonnante conversation de Marcel Schwob me gagnait à son charme propre plus qu'à ses sources. Je buvais tant qu'elle durait. J'avais le plaisir sans la peine. Mais enfin, je me réveillais ; ma paresse se redressait contre l'idée des lectures désespérantes, des recensions infinies, des méthodes scrupuleuses qui préservent de la certitude. Je disais à mon ami que de savants hommes courent bien plus de risques que les autres, puisqu'ils font des paris et que nous restons hors du jeu ; et qu'ils ont deux manières de se tromper : la nôtre, qui est aisée, et la leur, laborieuse. Que s'ils ont le bonheur de nous rendre quelques événements, le nombre même des vérités matérielles rétablies met en danger la réalité que nous cherchons. Le vrai à l'état brut est plus faux que le faux. Les documents nous renseignent au hasard sur la règle et sur l'exception. Un chroniqueur, même, préfère de nous conserver les singularités de son époque. Mais tout ce qui est vrai d'une époque ou d'un personnage ne sert pas toujours à les mieux connaître. Nul n'est identique au total exact de ses apparences; et qui d'entre nous n'a pas dit, ou qui n'a pas fait, quelque chose qui n'est pas *sienna*? Tantôt l'imitation, tantôt le lapsus, — ou l'occasion, — ou la seule lassitude accumulée d'être précisément celui qu'on est, altèrent pour un moment celui-là même; on nous croque pendant un dîner; ce feuillet passe à la postérité, tout habitée d'érudits, et nous voilà jolis pour toute l'éternité littéraire. Un visage faisant la grimace, si on le photographie dans cet instant, c'est un document irrécusable. Mais montrez-le aux amis du saisi ; ils n'y reconnaissent personne.

[§7] J'avais bien d'autres sophismes à la discrétion de mes dégoûts, tant la répugnance à de longs labours est ingénieuse. Toutefois, j'aurais peut-être affronté ces ennuis, s'ils m'avaient paru me conduire à la fin que j'aimais. J'aimais dans mes ténèbres la loi intime de ce grand Léonard. Je ne voulais pas de son histoire, ni seulement des productions de sa pensée... De ce front chargé de couronnes, je rêvais seulement à l'*amande*...

[§8] Que faire, parmi tant de réfutations, n'étant riche que de désirs, tout ivre que l'on soit de cupidité et d'orgueil intellectuels?

Se monter la tête? — Se donner enfin quelque fièvre littéraire? En cultiver le délire?

Je brûlais pour un beau sujet. Que c'est peu devant le papier!

Une grande soif, sans doute, s'illustre elle-même de ruisselantes visions; elle agit sur je ne sais quelles substances secrètes comme fait la lumière invisible sur le verre de Bohême tout pénétré d'urane; elle éclaire ce qu'elle attend, elle diamante des cruches, elle se peint l'opalescence de carafes... Mais ces breuvages qu'elle se frappe ne sont que spécieux; mais je trouvais indigne, et je le trouve encore, d'écrire par le seul enthousiasme. L'enthousiasme n'est pas un état d'âme d'écrivain.

Quelle grande que soit la puissance du feu, elle ne devient utile et motrice que par les machines où l'art l'engage; il faut que des gênes bien placées fassent obstacle à sa dissipation totale, et qu'un retard adroitement opposé au retour invincible de l'équilibre permette de soustraire quelque chose à la chute infructueuse de l'ardeur.

S'agit-il du discours, l'auteur qui le médite se sent être tout ensemble *source*, *ingénieur*, et *contraintes* : l'un de lui est impulsion; l'autre prévoit, compose, modère, supprime ; un troisième, —logique et mémoire, — maintient les données, conserve les liaisons, assure quelque durée à

l'assemblage voulu... *Écrire* devant être, le plus solidement et le plus exactement qu'on le puisse, de construire cette machine de langage où la détente de l'esprit excité se dépense à vaincre des résistances *réelles*, il exige de l'écrivain qu'il se divise contre lui-même. C'est en quoi seulement et strictement l'homme tout entier est *auteur*. Tout le reste n'est pas de *lui*, mais d'une partie de lui, échappée. Entre l'émotion ou l'intention initiale, et ces aboutissements que sont l'oubli, le désordre, le vague, — issues fatales de la pensée, — son affaire est d'introduire les contrariétés qu'il a créées, afin qu'interposées, elles disputent à la nature purement transitive des phénomènes intérieurs, un peu d'action renouvelable et d'existence indépendante...

[§9] Peut-être, je m'exagérais en ce temps-là, le défaut évident de toute littérature, de ne satisfaire jamais l'ensemble de l'esprit. Je n'aimais pas qu'on laissât des fonctions oisives pendant qu'on exerce les autres. Je puis dire aussi, (c'est dire la même chose), que je ne mettais rien au-dessus de la *conscience*; j'aurais donné bien des chefs-d'œuvre que je croyais irréfutés pour une page visiblement gouvernée.

Ces erreurs, qu'il serait aisé de défendre, et que je ne trouve pas encore si infécondes que je n'y retourne quelquefois, empoisonnaient mes tentatives. Tous mes préceptes, trop présents et trop définis, étaient aussi trop universels pour me servir dans aucune circonstance. Il faut tant d'années pour que les vérités que l'on s'est faites deviennent notre chair même !

Ainsi, au lieu de trouver en moi ces conditions, ces obstacles comparables à des forces extérieures, qui permettent que l'on avance contre son premier mouvement, je m'y heurtai à des chicanes mal disposées; et je me rendais à plaisir les choses plus difficiles qu'il eût dû sembler à de si jeunes regards qu'elles le fussent. Et je ne voyais de l'autre côté que velléités, possibilités, facilité dégoûtante : toute une richesse involontaire, vaine comme celle des rêves, remuant et mêlant l'infini des choses usées.

Si je commençais de jeter les dés sur un papier, je n'amenais que les mots témoins de l'impuissance de la pensée : *génie, mystère, profond...*, attributs qui conviennent au néant, renseignent moins sur leur sujet que sur la personne qui parle. J'avais beau chercher à me leurrer, cette politique mentale était courte : je répondais si promptement par mes sentences impitoyables à mes naissantes propositions, que la somme de mes échanges, dans chaque instant, était nulle.

Pour comble de malheur, j'adorais confusément, mais passionnément, la précision ; je prétendais vaguement à la conduite de mes pensées.

Je sentais, certes, qu'il faut bien, et de toute nécessité, que notre esprit compte sur ses hasards : fait pour l'imprévu, il le donne, il le reçoit; ses attentes expresses sont sans effets directs, et ses opérations volontaires ou régulières ne sont utiles qu'*après coup*, — comme dans une seconde vie qu'il donnerait au plus clair de lui-même. Mais je ne croyais pas à la puissance propre du délire, à la nécessité de l'ignorance, aux éclairs de l'absurde, à l'incohérence créatrice. Ce que nous tenons du hasard tient toujours un peu de son père! — Nos révélations, pensais-je, ne sont que des événements d'un certain ordre, et il faut encore interpréter ces *événements connus*. Il le faut toujours. Même les plus heureuses de nos intuitions sont en quelque sorte des résultats inexacts *par excès*, à l'égard de notre clarté ordinaire ; *par défaut*, au regard de la complexité infinie des moindres objets et des cas réels qu'elles prétendent nous soumettre. Notre mérite personnel, — après lequel nous soupirons, — ne consiste pas à les subir tant qu'à les saisir, à les saisir tant qu'à les discuter... Et notre riposte à notre « génie » vaut mieux parfois que son attaque.

Nous savons trop, d'ailleurs, que la probabilité est défavorable à ce démon : l'esprit nous souffle sans vergogne un million de sottises pour une belle idée qu'il nous abandonne; et cette chance même ne vaudra finalement quelque chose que par le traitement qui l'accommode à notre fin. — C'est ainsi que les minerais, inappréciables dans leur gîtes et dans leurs filons, prennent leur importance au soleil, et par les travaux de la surface.

Loin donc que ce soient les éléments intuitifs qui donnent leur valeur aux œuvres, ôtez les œuvres, et vos lueurs ne seront plus que des accidents spirituels perdus dans les statistiques de la vie locale du cerveau. Leur vrai prix ne vient pas de l'obscurité de leur origine, ni de la profondeur supposée d'où nous aimerions naïvement qu'elles sortent, et ni de la surprise précieuse qu'elles nous causent à nous-mêmes; mais bien d'une rencontre avec nos besoins, et enfin de l'usage réfléchi que nous saurons en faire, — c'est-à-dire, — de la collaboration de tout l'homme.

Mais s'il est entendu que nos plus grandes lumières sont intimement mêlées à nos plus grandes chances d'erreur, et que la moyenne de nos pensées est, en quelque sorte, insignifiante, — c'est celui en nous qui choisit, et c'est celui qui met en œuvre, qu'il faut exercer sans repos. Le reste, qui ne

dépend de personne, est inutile à invoquer comme la pluie. On le baptise, on le déifie, on le tourmente vainement : il n'en doit résulter qu'un accroissement de la simulation et de la fraude, — choses si naturellement unies à l'ambition de la pensée que l'on peut douter si elles en sont ou le principe, ou le produit. Le mal de prendre une hypallage pour une découverte, une métaphore pour une démonstration, un vomissement de mots pour un torrent de connaissances capitales, et soi-même pour un oracle, ce mal naît avec nous.

[§10] Léonard de Vinci n'a pas de rapport avec ces désordres. Parmi tant d'idoles que nous avons à choisir, puisqu'il en faut adorer au moins une, il a fixé devant son regard cette Rigueur Obstinée, qui se dit elle-même la plus exigeante de toutes. (Mais ce doit être la moins grossière d'entre elles, celle-ci que toutes les autres s'accordent pour haïr.)

La rigueur instituée, une liberté positive est possible, tandis que la liberté apparente n'étant que de pouvoir obéir à chaque impulsion de hasard, plus nous en jouissons, plus nous sommes enchaînés autour du même point, comme le bouchon sur la mer, que rien n'attache, que tout sollicite, et sur lequel se contestent et s'annulent toutes les puissances de l'univers.

L'entière opération de ce grand Vinci est uniquement déduite de son grand objet; comme si une personne particulière n'y était pas attachée, sa pensée paraît plus universelle, plus minutieuse, plus suivie et plus isolée qu'il n'appartient à une pensée individuelle. L'homme très élevé n'est jamais un *original*. Sa personnalité est aussi insignifiante qu'il le faut. Peu d'inégalités; aucune superstition de l'intellect. Pas de craintes vaines. Il n'a pas peur des analyses ; il les mène, — ou bien ce sont elles qui le conduisent, — aux conséquences éloignées ; il retourne au réel sans effort. Il imite, il innove ; il ne rejette pas l'ancien, parce qu'il est ancien; ni le nouveau, pour être nouveau; mais il consulte en lui quelque chose d'éternellement actuel.

Il ne connaît pas le moins du monde cette opposition si grosse et si mal définie, que devait, trois demi-siècles après lui, dénoncer entre l'esprit de finesse et celui de géométrie, un homme entièrement insensible aux arts, qui ne pouvait s'imaginer cette jonction délicate, mais naturelle, de dons distincts ; qui pensait que la peinture est vanité; que la vraie éloquence se moque de l'éloquence; qui nous embarque dans un pari où il engloutit toute finesse et toute géométrie ; et qui, ayant changé sa neuve lampe contre une vieille, se perd à coudre des papiers dans ses poches, quand c'était l'heure de donner à la France la gloire du calcul de l'infini...

Pas de révélations pour Léonard. Pas d'abîme ouvert à sa droite. Un abîme le ferait songer à un pont. Un abîme pourrait servir aux essais de quelque grand oiseau mécanique...

Et lui se devait considérer comme un modèle de bel animal pensant, absolument souple et délié; doué de plusieurs modes de mouvement; sachant, sous la moindre intention du cavalier, sans défenses et sans retards, passer d'une allure à toute autre. Esprit de finesse, esprit de géométrie, on les épouse, on les abandonne, comme fait le cheval accompli ses rythmes successifs... Il doit suffire à l'être suprêmement coordonné de se prescrire certaines modifications cachées et très simples au regard de la volonté, et immédiatement il passe de l'ordre des transformations purement formelles et des actes symboliques au régime de la connaissance imparfaite et des réalités spontanées. Posséder cette liberté dans les changements profonds, user d'un tel registre d'accommodations, c'est seulement jouir de l'intégrité de l'homme, telle que nous l'imaginons chez les anciens.

[§11] Une élégance supérieure nous déconcerte. Cette absence d'embarras, de prophétisme et de pathétisme; ces idéaux précis; ce tempérament entre les curiosités et les puissances, toujours rétabli par un maître de l'équilibre; ce dédain de l'illusionnisme et des artifices, et chez le plus ingénieux des hommes; cette ignorance du théâtre, ce sont des scandales pour nous. Quoi de plus dur à concevoir pour des êtres comme nous sommes, qui faisons de la « sensibilité » une sorte de profession, qui prétendons à tout posséder dans quelques effets élémentaires de contraste et de résonance nerveuse, et à tout saisir quand nous nous donnons l'illusion de nous confondre à la substance chatoyante et mobile de notre durée?

Mais Léonard, de recherche en recherche, se fait très simplement toujours plus admirable écuyer de sa propre nature; il dresse indéfiniment ses penses, exerce ses regards, développe ses actes ; il conduit l'une et l'autre main aux dessins les plus précis; il se dénoue et se rassemble, resserre la correspondance de ses volontés avec ses pouvoirs, pousse son raisonnement dans les arts, et préserve sa grâce.



[§12] Une intelligence si détachée arrive dans son mouvement à d'étranges attitudes, — comme une danseuse nous étonne, de prendre et de conserver quelque temps des figures de pure instabilité. Son indépendance choque nos instincts et se joue de nos vœux. Rien de plus libre, c'est-à-dire, rien de moins humain, que ses jugements sur l'amour, sur la mort. Il nous les donne à deviner par quelques fragments, dans ses cahiers.

« L'amour dans sa fureur, (dit-il, à peu près), est chose si laide que la race humaine s'éteindrait, — *la natura si perderebbe*, — si ceux qui le font se voyaient. » Ce mépris est accusé par divers croquis, car le comble du mépris pour certaines choses est enfin de les examiner à loisir. Il dessine donc çà et là des unions anatomiques, coupes effroyables à même l'amour. La machine érotique l'intéresse, la mécanique animale étant son domaine le préféré; mais un combat de sueurs et l'essoufflement des *opranti*, un monstre de musculatures antagonistes, une transfiguration en bêtes, — cela semble n'exciter en lui que répugnance et que dédain...

Son jugement sur la mort, il faut le tirer d'un texte assez court, — mais texte d'une plénitude et d'une simplicité antiques, qui devait peut-être prendre place dans le préambule d'un Traité, jamais achevé, du Corps Humain.

Cet homme, qui a disséqué dix cadavres pour suivre le trajet de quelques veines, songe : l'organisation de notre corps est une telle merveille que l'âme, quoique *chose divine*, ne se sépare qu'avec les plus grandes peines de ce corps qu'elle habitait. — *Et je crois bien*, dit Léonard, *que ses larmes et sa douleur ne sont pas sans raison...*

N'allons pas approfondir l'espèce de doute chargé de sens qui est dans ces mots. Il suffit de considérer l'ombre énorme ici projetée par quelque idée en formation : la mort, interprétée comme un désastre pour l'âme; la mort du corps, diminution de cette *chose divine* ! La mort, atteignant l'âme jusqu'aux larmes, et dans son œuvre la plus chère, par la destruction d'une telle architecture qu'elle s'était faite pour y habiter!

Je ne tiens pas à déduire de ces réticentes paroles une métaphysique selon Léonard; mais je me laisse aller à un rapprochement assez facile, puisqu'il se fait de soi dans ma pensée. Pour un tel amateur d'organismes, le corps n'est pas une guenille toute méprisable; ce corps a trop de propriétés, il résout trop de problèmes, *il possède trop de fonctions et de ressources pour ne pas répondre à quelque exigence transcendante, assez puissante pour le construire, pas assez puissante pour se passer de sa complication*. Il est œuvre et instrument de quelqu'un qui a besoin de lui, qui ne le rejette pas volontiers, qui le pleure comme on pleurerait le pouvoir... Tel est le sentiment du Vinci. Sa philosophie est toute *naturaliste*, très choquée par le *spiritualisme*, très attachée au mot-de l'explication physico-mécanique ; quand, sur le point de l'âme, la voici toute comparable à la philosophie de l'Eglise. L'Eglise, — pour autant du moins, que l'Eglise est Thomiste, — ne donne pas à l'âme séparée une existence bien enviable. Rien de plus pauvre que cette âme qui a perdu son corps. Elle n'a guère que l'être même : c'est un minimum logique, une sorte de vie latente dans laquelle elle est inconcevable pour nous, et sans doute, pour elle-même. Elle a tout dépouillé : pouvoir, vouloir; savoir, peut-être? Je ne sais même pas s'il lui peut souvenir d'avoir été, dans le temps et quelque part, la forme et l'*acte* de son corps? Il lui reste l'honneur de son autonomie... Une si vaine et si insipide condition n'est heureusement que passagère, — si ce mot, hors de la durée, retient un sens : la raison demande, et le dogme impose, la restitution de la chair. Sans doute, les qualités de cette chair suprême seront-elles bien différentes de celles que notre chair aura possédées. Il faut concevoir, je pense, tout autre chose ici qu'un simple renversement du principe de Carnot et qu'une réalisation de l'*improbable*. Mais il est inutile de s'aventurer aux extrêmes de la physique, de rêver d'un corps glorieux dont la masse serait avec l'attraction universelle dans une autre relation que la nôtre, et cette masse variable en un tel rapport avec la vitesse de la lumière que l'*agilité* qui lui est prédite soit réalisée... Quoi qu'il en soit, l'âme dépouillée doit, selon la théologie, retrouver dans un certain corps, une certaine vie fonctionnelle ; et par ce corps nouveau, une sorte de matière qui permette ses opérations, et remplisse de merveilles incorruptibles — ses vides catégories intellectuelles.

Un dogme qui concède à l'organisation corporelle cette importance à peine secondaire, qui réduit remarquablement l'âme, qui nous interdit et nous épargne le ridicule de nous la figurer, qui va jusqu'à l'obliger de se réincarner pour qu'elle puisse participer à la pleine vie éternelle, ce dogme si exactement contraire au spiritualisme pur, sépare, de la manière la plus sensible, l'Eglise, de la plupart des autres confessions chrétiennes. — Mais il me semble que depuis deux ou trois siècles, il

n'est pas d'article sur lequel la littérature religieuse ait passé plus légèrement. Apologistes, prédicateurs n'en parlent guère... La cause de ce demi-silence m'échappe.

[§13] Je me suis égaré si loin dans Léonard que je ne sais pas tout d'un coup revenir à moi-même... Bah! Tout chemin m'y reconduira : c'est la définition de ce moi-même. Il ne peut pas absolument se perdre, il ne perd que son temps.

Suivons donc un peu plus avant la pente et la tentation de l'esprit; suivons-les malheureusement sans craintes, cela ne mène à aucun fond véritable. Même notre pensée la plus « profonde » est contenue dans les conditions invincibles qui font que toute pensée est « superficielle ». On ne pénètre que dans une forêt de transpositions; ou bien c'est un palais fermé de miroirs, que féconde une lampe solitaire qu'ils enfantent à l'infini.

Mais encore, essayons de notre seule curiosité pour nous éclairer le système caché de quelque individu de la première grandeur; et imaginons à peu près comme il doit s'apparaître, quand il s'arrête quelquefois dans le mouvement de ses travaux et qu'il se regarde dans l'ensemble.

Il se considère d'abord assujéti aux nécessités et réalités communes; et il se replace ensuite dans le secret de la connaissance séparée. Il voit comme nous et il voit comme soi. Il a un jugement de sa nature et un sentiment de son artifice. Il est absent et présent. Il soutient cette espèce de dualité que doit soutenir un prêtre. Il sent bien qu'il ne peut pas se définir entièrement devant lui-même par les données et par les mobiles ordinaires. *Vivre*, et même bien vivre, ce n'est qu'un moyen pour lui quand il mange, il alimente aussi quelque autre merveille que sa vie, et la moitié de son pain est consacrée. *Agir*, ce n'est encore qu'un exercice. *Aimer*, je ne sais pas s'il lui est possible. Et quant à la gloire, non. Briller à d'autres yeux, c'est en recevoir un éclat de fausses pierreries.

[§14] Il lui faut cependant se découvrir je ne sais quels points de repère tellement placés que sa vie particulière et cette *vie généralisée* qu'il s'est trouvée, se composent. La clairvoyance imperturbable qui lui semble, (mais sans le convaincre tout à fait), le représenter tout entier à lui-même, voudrait se soustraire à la relativité qu'elle ne peut pas ne pas conclure de tout le reste. Elle a beau se transformer en elle-même, et de jour en jour, se reproduire aussi pure que le soleil, cette identité apparente emporte avec elle un sentiment qu'elle est trompeuse. Elle sait, dans sa fixité, être soumise à un mystérieux entraînement et à une modification sans témoin ; et elle sait donc qu'elle enveloppe toujours, même à l'état le plus net de sa lucidité, une possibilité cachée de faillite et de totale ruine, — comme il arrive au rêve le plus précis de contenir un germe inexplicable de non-réalité.

C'est une manière de lumineux supplice que de sentir que l'on voit tout, sans cesser de sentir que l'on est encore *visible*, et l'objet concevable d'une attention étrangère; et sans se trouver jamais le poste ni le regard qui ne laissent rien derrière eux.

— *Durus est hic sermo*, va bientôt dire le lecteur. Mais en ces matières, qui n'est pas vague est difficile, qui n'est pas difficile est nul. Allons encore un peu.

[§15] Pour une présence d'esprit aussi sensible à elle-même, et qui se ferme sur elle-même par le détour de « l'Univers », tous les événements de tous les genres, et la vie, et la mort, et les pensées, ne lui sont que des *figures* subordonnées. Comme chaque *chose visible* est à la fois étrangère, indispensable, et inférieure à la *chose qui y voit*, ainsi l'importance de ces figures, si grande qu'elle apparaisse à chaque instant, pâlit à la réflexion devant la seule persistance de l'attention elle-même. Tout le cède à cette universalité pure, à cette généralité insurmontable que la conscience se sent être.

Si tels événements ont le pouvoir de la supprimer, ils sont du même coup, destitués de toute signification; que s'ils la conservent, ils rentrent dans son système. L'intelligence ignore d'être née, comme elle ignore qu'elle périra. Elle est instruite, oui, de ses fluctuations et de son effacement final, mais au titre d'une notion qui n'est pas d'une autre espèce que les autres; elle se croirait, très aisément, inamissible et inaltérable, si ce n'était qu'elle a reconnu par ses expériences, un jour ou l'autre, diverses possibilités funestes, et l'existence d'une certaine pente qui mène plus bas que tout. Cette pente fait pressentir qu'elle peut devenir irrésistible; elle prononce le commencement d'un éloignement sans retour du soleil spirituel, du maximum admirable de la netteté, de la solidité, du pouvoir de distinguer et de choisir; on la devine, qui s'abaisse, obscurcie de mille impuretés psychologiques, obsédée de bourdons et de vertiges, à travers la confusion des temps et le trouble des fonctions, et qui se dirige défaillante au milieu d'un désordre inexprimable des *dimensions* de la

connaissance, jusqu'à l'état instantané et indivis qui étouffe ce chaos dans la nullité.

[§16] Mais, opposé tout de même à la mort qu'il l'est à la vie, un système complet de substitutions psychologiques, plus il est conscient et se remplace par lui-même, plus il se détache de toute origine, et plus se dépouille-t-il, en quelque sorte, de toute chance de rupture. Pareil à l'anneau de fumée, le système tout d'énergies intérieures prétend merveilleusement à une indépendance et à une insécabilité parfaites. Dans une très claire conscience, la mémoire et les phénomènes se trouvent tellement reliés, attendus, répondus; le passé si bien employé: le nouveau si promptement compensé; l'état de relation totale si nettement reconquis que rien ne semble pouvoir commencer, rien se terminer, au sein de cette activité presque pure. L'échange perpétuel de *choses* qui la constitue, l'assure en apparence d'une conservation indéfinie, car elle n'est attachée à aucune; et elle ne contient pas quelque *élément-limite*, quelque objet singulier de perception ou de pensée, tellement plus réel que tous les autres, que quelque autre ne puisse pas venir après lui. Il n'est pas une telle idée qu'elle satisfasse aux conditions inconnues de la conscience au point de la faire évanouir. Il n'existe pas de pensée qui extermine le pouvoir de penser, et le conclue, — une certaine position du pêne qui ferme définitivement la serrure. Non, point de pensée qui soit pour la pensée une résolution née de son développement même, et comme un accord final de cette dissonance permanente.

[§17] Puisque la connaissance ne se connaît pas d'extrémité, et puisque aucune idée n'épuise la tâche de la conscience, il faut bien qu'elle périsse dans un événement incompréhensible que lui prédisent et que lui préparent ces affres et ces sensations extraordinaires dont je parlais; qui nous esquisseraient des mondes instables et incompatibles avec la plénitude de la vie; mondes inhumains, mondes infirmes et comparables à ces mondes que le géomètre ébauche en jouant sur les axiomes, le physicien en supposant d'autres constantes que celles admises. Entre la netteté de la vie et la simplicité de la mort, les rêves, les malaises, les extases, tous ces états à demi impossibles, qui introduisent, dirait-on, des valeurs approchées, des solutions irrationnelles ou transcendantes dans l'équation de la connaissance, placent d'étranges degrés, des variétés et des phases ineffables, — car il n'est point de noms pour des choses parmi lesquelles on est bien seul.

Comme la perfide musique compose les libertés du sommeil avec la suite et l'enchaînement de l'extrême attention, et fait la synthèse d'êtres intimes momentanés, ainsi les fluctuations de l'équilibre psychique donnent à percevoir des modes aberrants de l'existence. Nous portons en nous des formes de la sensibilité qui ne peuvent pas réussir, mais qui peuvent naître. Ce sont des instants dérobés à la critique implacable de la durée; ils ne résistent pas au fonctionnement complet de notre être : ou nous périssons, ou ils se dissolvent. Mais ce sont des monstres pleins de leçons que ces monstres de l'entendement, et que ces états de passage, — espaces dans lesquels la continuité, la connexion, la mobilité connues sont altérées; empires où la lumière est associée à la douleur; champs de forces où les craintes et les désirs orientés nous assignent d'étranges circuits; matière qui est faite de temps ; abîmes littéralement d'horreur, ou d'amour, ou de quiétude; régions bizarrement soudées à elles-mêmes, domaines non-archimédiens qui défient le mouvement; sites perpétuels dans un éclair; surfaces qui se creusent, conjuguées à notre nausée, infléchies sous nos moindres intentions... On ne peut pas dire qu'ils sont réels; on ne peut pas dire qu'ils ne le sont pas. Qui ne les a pas traversés ne connaît pas le prix de la lumière naturelle et du milieu le plus banal; il ne connaît pas la véritable fragilité du monde, qui ne se rapporte pas à l'alternative de l'être et du non-être; ce serait trop simple! — L'étonnement, ce n'est pas que les choses soient; c'est qu'elles soient *telles*, et non telles autres. La *figure de ce monde* fait partie d'une famille de figures dont nous possédons sans le savoir tous les éléments de groupe infini. C'est le secret des inventeurs.

[§18] Au sortir de ces intervalles, et des écarts personnels où les faiblesses, la présence de poisons dans le système nerveux, mais où les forces et les finesses aussi de l'attention, la logique la plus exquise, la mystique bien cultivée, conduisent diversement la conscience, celle-ci vient donc à soupçonner toute la réalité accoutumée de n'être qu'une solution, parmi bien d'autres, de problèmes universels. Elle s'assure que les *choses* pourraient être *assez* différentes de ce qu'elles sont, sans qu'elle-même fût *très* différente de ce qu'elle est. Elle ose considérer son « corps » et son « monde » comme des restrictions presque arbitraires imposées à l'étendue de sa fonction. Elle voit qu'elle correspond, ou qu'elle répond, non à un *monde*, mais à quelque système de degré plus élevé dont les

éléments soient des mondes. Elle est capable de plus de combinaisons internes qu'il n'en faut pour vivre; de plus de rigueur que toute occasion pratique n'en requiert et n'en supporte; elle se juge plus profonde que l'abîme même de la vie et de la mort animales; et ce regard sur sa condition ne peut réagir sur elle-même, tant elle s'est reculée et placée hors du tout, et tant elle s'est appliquée à *ne jamais figurer dans quoi que ce soit qu'elle puisse concevoir ou se répondre*. Ce n'est plus qu'un corps noir qui tout absorbe et ne rend rien.

Retirant de ces remarques exactes et de ces prétentions inévitables une hardiesse périlleuse; forte de cette espèce d'indépendance et d'invariance qu'elle est contrainte de s'accorder, elle se pose enfin comme fille directe et ressemblante de l'être sans visage, sans origine, auquel incombe et se rapporte toute la tentative du cosmos... Encore un peu, et elle ne compterait plus comme existences nécessaires que deux entités essentiellement inconnues : Soi et X. Toutes deux abstraites de tout, impliquées dans tout, impliquant tout. Egales et consubstantielles.

[§19] L'homme que l'exigence de l'infatigable esprit conduit à ce contact de ténèbres éveillées, et à ce point de présence pure, se perçoit comme nu et dépouillé, et réduit à la suprême pauvreté de la puissance sans objet; victime, chef-d'œuvre, accomplissement de la simplification et de l'ordre dialectique; comparable à cet état où parvient la plus riche pensée quand elle s'est assimilée à elle-même, et reconnue, et consommée en un petit groupe de caractères et de symboles. Le même travail que nous faisons sur un objet de réflexions, il l'a dépensé sur le sujet qui réfléchit.

Le voici sans instincts, presque sans images; et il n'a plus de but. Il n'a pas de semblables. Je dis : *homme*, et je dis : *il*, par analogie et par manque de mots.

Il ne s'agit plus de choisir, ni de créer; et pas plus de se conserver que de s'accroître. Rien n'est à surmonter, et il ne peut pas même être question de se détruire.

Tout « génie » est maintenant consumé, ne peut plus servir de rien. Ce ne fut qu'un moyen pour atteindre à la dernière simplicité. Il n'y a pas d'acte du génie qui ne soit *moindre* que l'acte d'être. Une loi magnifique habite et fonde l'imbécile; l'esprit le plus fort ne trouve pas mieux en soi-même.

[§20] Enfin, cette conscience accomplie s'étant contrainte à se définir par le total des choses, et comme l'*excès* de la connaissance sur ce Tout, — elle, qui pour s'affirmer doit commencer par nier une infinité de fois, une infinité d'éléments, et par épuiser les objets de son pouvoir sans épuiser ce pouvoir même, — elle est donc différente du néant, d'aussi peu que l'on voudra.

— Elle fait songer naïvement à une assistance invisible logée dans l'obscurité d'un théâtre. Présence qui ne peut pas se contempler, condamnée au spectacle adverse, et qui sent toutefois qu'elle compose toute cette nuit haletante, invinciblement orientée. Nuit complète, nuit impénétrable, nuit absolue; mais nuit nombreuse, nuit très avide, nuit secrètement organisée, toute construite d'organismes qui se limitent et se compriment; nuit compacte aux ténèbres bourrées d'organes, qui battent, qui soufflent, qui s'échauffent, et qui défendent, chacun selon sa nature, leur emplacement et leur fonction. En regard de l'intense et mystérieuse assemblée, brillent dans un cadre fermé, et s'agitent, tout le Sensible, l'Intelligible, le Possible. Rien ne peut naître, périr, être à quelque degré, avoir un moment, un lieu, un sens, une figure, — si ce n'est sur cette *scène* définie, que les destins ont circonscrite, et que l'ayant séparée de je ne sais quelle confusion primordiale, comme furent au premier jour les ténèbres séparées de la lumière, ils ont opposée et subordonnée à la condition d'*être vue*...

[§21] Si je vous ai menés dans cette solitude, et jusqu'à cette netteté désespérée, c'est qu'il fallait bien conduire à sa dernière conséquence l'idée que je me suis faite d'une puissance intellectuelle. Le caractère de l'homme est la conscience ; et celui de la conscience, une perpétuelle exhaustion; un détachement sans repos et sans exception de tout ce qu'y paraît, quoi qui paraisse. Acte inépuisable, indépendant de la qualité comme de la quantité des choses apparues, et par lequel l'*homme de l'esprit* doit enfin se réduire sciemment à un refus indéfini d'être quoi que ce soit.

Tous les phénomènes, par là frappés d'une sorte d'égale répulsion, et comme rejetés successivement par un geste identique, apparaissent dans une certaine équivalence. Les sentiments et les pensées sont enveloppés dans cette condamnation uniforme, étendue à tout ce qui est perceptible. Il faut bien comprendre que rien n'échappe à la rigueur de cette exhaustion; mais qu'il suffit de notre attention pour mettre nos mouvements les plus intimes au rang des événements et des objets extérieurs du moment qu'ils sont observables, ils vont se joindre à toutes choses observées. —

Couleur et douleur; souvenirs, attente et surprises; cet arbre, et le flottement de son feuillage, et sa variation annuelle, et son ombre comme sa substance, ses accidents de figure et de position; les pensées très éloignées qu'il rappelle à ma distraction, — *tout cela est égal...* Toutes choses se substituent, — ne serait-ce pas la définition des *choses*?

[§22] Il est impossible que l'activité de l'esprit ne le contraigne pas enfin à cette considération extrême et élémentaire. Ses mouvements multipliés, ses intimes contestations, ses perturbations, ses retours analytiques, que laissent-ils d'inaltéré? Qu'est-ce qui résiste à l'entrain des sens, à la dissipation des idées, à l'affaiblissement des souvenirs, à la variation lente de l'organisme, à l'action incessante et multiforme de l'univers? — Ce n'est que cette conscience seule, à l'état le plus abstrait.

Notre *personnalité* elle-même, que nous prenons grossièrement pour notre plus intime et plus profonde *propriété*, pour notre souverain bien, n'est qu'une *chose*, et muable et accidentelle, auprès de ce *moi* le plus nu ; puisque nous pouvons penser à elle, calculer ses intérêts, et même les perdre un peu de vue, elle n'est donc qu'une divinité psychologique secondaire, qui habite notre miroir et qui obéit à notre nom. Elle est de l'ordre des Pénates. Elle est sujette à la douleur, friande de parfums comme les faux dieux, et comme eux, la tentation des vers. Elle s'épanouit dans les louanges. Elle ne résiste pas à la force des vins, à la délicatesse des paroles, à la sorcellerie de la musique. Elle se chérit, et se trouve par là docile et facile à conduire. Elle se disperse dans le carnaval de la démente, elle se plie bizarrement aux anamorphoses du sommeil. Plus encore : elle est contrainte, avec ennui, de se reconnaître des égales, de s'avouer qu'elle est *inférieure* à telles autres; et ce lui est amer et inexplicable.

Tout, d'ailleurs, la fait convenir qu'elle est un simple événement; qu'il lui faut figurer, avec tous les accidents du monde, dans les statistiques et dans les tables ; qu'elle a commencé par une chance séminale, et dans un incident microscopique; qu'elle a couru des milliards de risques ; été façonnée par une quantité de rencontres, et qu'elle est en somme, tout admirable, toute volontaire, tout accusée et étincelante qu'elle puisse être, l'effet d'un incalculable désordre.

Chaque *personne* étant un « jeu de la nature », jeu de l'amour et du hasard, la plus belle intention; et même la plus savante pensée de cette créature toujours improvisée, se sentent inévitablement de leur origine. Son acte est toujours relatif, ses chefs-d'œuvre sont casuels. Elle pense périssable, elle pense individuel, elle pense par raccrocs; et elle ramasse le meilleur de ses idées dans des occasions fortuites et secrètes qu'elle se garde d'avouer. — Et d'ailleurs, elle n'est pas sûre d'être positivement *quelqu'un*; elle se déguise et se nie plus facilement qu'elle ne s'affirme. Tirant de sa propre inconsistance quelques ressources et beaucoup de vanité, elle met dans les fictions son activité favorite. Elle vit de romans, elle épouse sérieusement mille personnages. Son héros n'est jamais soi-même...

Enfin, les neuf dixièmes de sa durée se passent dans ce qui n'est pas encore, dans ce qui n'est plus, dans ce qui ne peut pas être; tellement que notre véritable *présent* a neuf chances sur dix de n'être jamais.

[§23] Mais chaque vie si particulière possède toutefois, à la profondeur d'un trésor, la permanence fondamentale d'une conscience que rien ne supporte; et comme l'oreille retrouve et reperd, à travers les vicissitudes de la symphonie, un son grave et continu qui ne cesse jamais d'y résider, mais qui cesse à chaque instant d'être saisi, — le *moi* pur, élément unique et monotone de l'être même dans le monde, retrouvé, reperdu par lui-même, habite éternellement notre sens; cette profonde *note* de l'existence domine, dès qu'on l'écoute, toute la complication des conditions et des variétés de l'existence.

L'œuvre capitale et cachée du plus grand esprit n'est-elle pas de soustraire cette attention substantielle à la lutte des vérités ordinaires? Ne faut-il pas qu'il arrive à se définir, contre toutes choses, par cette pure relation immuable entre les objets les plus divers, ce qui lui confère une généralité presque inconcevable, et le porte en quelque manière, à la puissance de l'univers correspondant? — Ce n'est pas sa chère *personne* qu'il élève à ce haut degré, puisqu'il la renonce en y pensant, et qu'il la substitue dans la place du *sujet* par ce moi inqualifiable, qui n'a pas de nom, qui n'a pas d'histoire, qui n'est pas plus sensible, ni moins réel que le centre de masse d'une bague ou d'un système planétaire, — mais qui résulte de tout, quel que soit ce tout...

Tout à l'heure, le but évident de cette merveilleuse vie intellectuelle était encore... de s'étonner

d'elle-même. Elle s'absorbait à se faire des enfants qu'elle admirât; elle se bornait à ce qu'il y a de plus beau; de plus doux, de plus clair et de plus solide; elle n'était gênée que de sa comparaison avec d'autres organisations concurrentes; elle s'embarrassait du problème le plus étrange que l'on puisse jamais se proposer; et que nous proposent nos semblables, et qui consiste simplement dans la possibilité des autres intelligences,, dans la pluralité du singulier, dans la coexistence contradictoire de durées indépendantes entre elles, — *tot capita, tot tempora*, — problème comparable au problème physique de la *relativité*, mais incomparablement plus difficile...

Et voici que son zèle pour être unique l'emportant, et que son ardeur pour être toute puissante l'éclairant, elle a dépassé toutes créations, toutes œuvres et jusqu'à ses desseins les plus grands, en même temps qu'elle dépose toute tendresse pour elle-même, et toute préférence pour ses vœux. Elle immole en un moment son individualité. Elle se sent conscience pure : il ne peut pas en exister deux. Elle est le *moi*, le pronom universel, appellation de *ceci* qui n'a pas de rapport avec un visage. O quel point de transformation de l'orgueil, et comme il est arrivé où il ne savait pas qu'il allait! Quelle modération le récompense de ses triomphes ! Il fallait bien qu'une vie si fermement dirigée, et qui a traité comme des obstacles ou que l'on tourne ou que l'on renverse, tous les objets qu'elle pouvait se proposer, ait enfin une conclusion inattaquable, non une conclusion de sa durée, mais une conclusion en elle-même... Son orgueil l'a conduite jusque là, et là se consume. Cet orgueil conducteur l'abandonne étonnée, nue, infiniment simple sur le pôle de ses trésors.

[§24] Ces pensées ne sont pas mystérieuses. On aurait pu écrire tout abstraitement que le groupe le plus général de nos transformations, qui comprend toutes sensations, toutes idées, tous jugements, tout ce qui se manifeste *intus et extra*, admet un *invariant*.

[§25] Je me suis laissé aller au delà de toute patience et de toute clarté, et j'ai succombé aux idées qui me sont venues pendant que je parlais de ma tâche. J'achève en peu de mots cette peinture un peu simplifiée de mon état : encore quelques instants à passer en 1894.

Rien de si curieux que la lucidité aux prises avec l'insuffisance. Voici à peu près ce qui arrive, ce qui devait arriver, ce qui m'arriva.

J'étais placé dans la nécessité d'inventer un personnage capable de bien des œuvres. J'avais la manie de n'aimer que le fonctionnement des êtres, et dans les œuvres, que leur génération. Je savais que ces œuvres sont toujours des falsifications, des arrangements, l'*auteur* n'étant heureusement jamais l'*homme*. La vie de celui-ci n'est pas la vie de celui-là : accumulez tous les détails que vous pourrez sur la vie de Racine, vous n'en tirerez pas l'art de faire ses vers. Toute la critique est dominée par ce principe suranné : l'homme est *cause* de l'œuvre, — comme le criminel aux yeux de la loi est *cause* du crime. Ils en sont bien plutôt l'effet ! Mais ce principe pragmatique allège le juge et le critique; la biographie est plus simple que l'analyse. Sur ce qui nous intéresse le plus, elle n'apprend absolument rien... Davantage ! La véritable vie d'un homme, toujours mal définie, même pour son voisin, même pour lui-même, ne peut pas être utilisée dans une explication de ses œuvres, si ce n'est indirectement, et moyennant une élaboration très soignée.

Donc, ni maîtresses, ni créanciers, ni anecdotes, ni aventures, — on est conduit au système le plus honnête : imaginer à l'exclusion de tous ces détails extérieurs, un être théorique, un *modèle* psychologique plus ou moins grossier, mais qui représente, en quelque sorte, notre propre capacité de reconstruire l'œuvre que nous nous sommes proposé de nous expliquer. Le succès est très douteux, mais le travail n'est pas ingrat : s'il ne résout pas les problèmes insolubles de la parthénogenèse intellectuelle, du moins il les *pose*, et dans une netteté incomparable.

Dans la circonstance, cette conviction était mon seul bien positif.

[§26] La nécessité où j'étais placé, le vide que j'avais si bien fait de toutes les solutions antipathiques à ma nature, l'érudition écartée, les ressources rhétoriques différées, tout me mettait dans un état désespéré... Enfin, je le confesse, je ne trouvai pas mieux que d'attribuer à l'infortuné Léonard mes propres agitations, transportant le désordre de mon esprit dans la complexité du sien. Je lui infligeai tous mes désirs à titre de choses possédées. Je lui prêtai bien des difficultés qui me hantaient dans ce temps-là, comme s'il les eût rencontrées et surmontées. Je changeai mes embarras en sa puissance supposée. J'osai me considérer sous son nom, et utiliser ma personne.

Cela était faux, mais vivant. Un jeune homme, curieux de mille choses, ne doit-il pas, après tout,

ressembler assez bien à un homme de la Renaissance? Sa naïveté même ne représente-t-elle pas l'espèce de naïveté relative *créée* par quatre siècles de découvertes au détriment des hommes de ce temps-là? —, Et puis, pensai-je, Hercule n'avait pas plus de muscles que nous; ils n'étaient que plus gros. Je ne puis même pas déplacer le rocher qu'il enlève, mais la structure de nos machines n'est pas différente ; je lui corresponds os par os,, fibre par fibre, acte par acte, et notre similitude me permet l'imagination de ses travaux.

Une brève réflexion fait connaître qu'il n'y a pas d'autre parti que l'on puisse prendre. Il faut se mettre sciemment à la place de l'être qui nous occupe... Et quel autre que nous-mêmes peut répondre, quand nous appelons un *esprit*? On n'en trouve jamais qu'en soi. C'est notre propre fonctionnement qui, *seul*, peut nous apprendre quelque chose sur toute chose. Notre connaissance, à mon sentiment, a pour limite la conscience que nous pouvons avoir de notre être, — et peut-être, *de notre corps*. Quel que soit X, la pensée que j'en ai, si je la presse, tend vers moi, quel que je sois. On peut l'ignorer ou le savoir, le subir ou le désirer, mais il n'y a point d'échappatoire, point d'autre issue. L'*intention* de toute pensée est en nous. C'est avec notre propre substance que nous imaginons et que nous formons une pierre, une plante, un mouvement, un *objet* : une image quelconque n'est peut-être qu'un commencement de nous-mêmes...

[§27]

*lionardo mio  
o lionardo che tanto penate.*

Quant au vrai Léonard, il fut ce qu'il fut... Ce mythe, toutefois, plus étrange que tous les autres, gagne indéfiniment à être replacé de la fable dans l'histoire. Plus on va, plus précisément il grandit. Les expériences d'Ader et des Wright ont illuminé d'une gloire rétrospective le *Code sur le vol des oiseaux*; le germe des théories de Fresnel se trouve dans certains passages des manuscrits de l'Institut. Au cours de ces dernières années, les recherches du regretté M. Duhem sur les *Origines de la statique* ont permis d'attribuer à Léonard le théorème fondamental de la composition des forces, et une notion très nette — quoique incomplète — du principe du travail virtuel.

1919.